

利イ坊さまと乞食

ガラ、ガラ、お店の前を通る牛乳屋さんの車の音にチビ君は目をさました。いつもきまつてゐる時間である。時計を見ると七時廿分前！

傍を見るとお母さんはまだ眠つていらつしやるらしい。いつもならとつと起きてお臺所でゴト／＼音をさせてゐる階下のお姉さんも、今朝はまだらしく家中まだシーンとしてゐた。

今朝は日曜である。日曜日はチビ君が學校へ行かないので、家中七時まで眠る事になつてゐるのである。

起きたいな——チビ君はかけぶとんの衤からピヨコンと首をつき出してお縁側の方を見る。明

るい陽の光が雨戸の隙間からチラ／＼と洩れて居る。チ、チと雀の聲が聞える。

(アラ、うれしい。いゝお天氣だわ！)

何だか胸がドキ／＼する。それもその筈、今日は修三さまのところへ伺つて郊外散歩をするのである。そしてテニスを教へていたゞくお約束なのである。

チビ君は今、テニスに熱中してゐる。學校で、春になつて校庭の一隅のテニスコートがひらかれると、一齊に皆ラケットをふりまはしはじめた。戸田さんは組中で一番上手い。もとの一年の時、四年生とやつて決勝戦まで残つたと云ふ名人である。この戸田さんがやりはじめると、高木さんも負けずにやり出した。高木さんのテニスはまるでお魚か何かすくふみたいである。時々自分のおでこをビチャンとたゞく。そしてボールは丸で野球のホームランみたいに、空高く眞すぐにとんで行つて了ふのである。ところがそれはまだいゝ方である。兎に角ボールがラケットに當るだけ上等である。チビ君と來たら、恥しくてラケットをもつて立つてゐるだけである。「ソラア！」と戸田さんが、ワザとチビ君の方へボールを打つてくれる時があるけれど、思はずヒヤツとして首をすつこめて、ラケットをブラ下げて逃げちまふのである。高木さんは遠慮なし屋だも

んでホームランばかりやつてゐるが、だんく十遍に一度位はあたり前に打てる様になつて来た。羨ましくて仕様がなない。

或日、利イ坊さまの御家へ行くと、修三さまがラケットをもつて歸つていらつした事があつた。それからテニスの話になつて、チビ君も目下熱中してゐる事をお話すると、修三さまは大喜びである。「ヨキ傾向ぢや」と顔中口にしてほめて下さつた。それから、

「今度の日曜日にやりに行かないかア？」

「だつて、一寸も打てないんですものオ」

「打てないから打てる様にしに行くんだよ、バカだな。いくら待つてゐたつて自然に打てる様になんかやりやしないヨ。」

と云ふ事になつて、今日のお約束になつたのである。

場所は幡ヶ谷と云ふところで、そこには小岩へお越しになつた叔父さまの持つていらつしやるコートがあるんだ相である。「今まで放つておいたのだけれど、整理をしてローラーをかけて使へる様にしておくから、坊主たちもせいぐお使ひよ」といつか小岩の叔父さまのお話だつたの

だ相で、そのコートへ行かうと云ふのである。そこへ行く迄の間にはとても大きな原つばやきれいな小川がある。

「ハイキングやピクニックにもいゝよ」と叔父さまがお笑ひになつた。

「エツ、そんな遠いんすか？」と修三さまが目丸くした。

「いや、さうでもないさ。だが春先のいゝお天気の時、あすこいらブラ／＼散歩するのもしゝもんだよ」

「私も行き度いなア」利イ坊さまが甘つたれ聲を出した。

「連れて行つてもらへよ。バスケットにお辨當やお菓子を入れてな。テニスの玉ひろひには丁度いゝ……アハハ……打つより拾ふ方が忙しさうだから……」

「こいつはひどいなア」修三さまは頭をかいて舌をペロリと出した。イカにも叔父様のおつしやる通りの腕前なのである。

チビ君は、お母さんのこしらへて下さつた玉子焼入りのおノリマキと、キヤラメルやドロップ

をウントコさと入れたカバンを右手に、左手には買ひ立てのラケットを大事相にかゝへて家を出た。

修三さまにテニスを教へていたゞくのだから——と云つてやつと買つていたゞいた新しいラケットである。お姉さんが二圓、兄さんが一圓五十錢、出して下さつた。

三圓五十錢のラケット。「初歩の御練習用にはこれが一番よろしうございます」と云つた運道具店の番頭さんの聲音を思ひ出し乍ら、チビ君はイソ／＼と歩いて行つた。修三さまの御家へ行くと、お縁側の陽のよくあたる所で、修三さまは運動靴のヒモを通していらつしやつた。

「おゝ、早いなア。もう用意はいゞんだけだね、こつちも。お母さん、利恵子なんかおいて行つちまつてもいゞでせう？」修三さまは大きな聲でお茶の間へどなる。——

「何ですね、折角楽しみにしてゐるのに。もう歸つて來ますよ。別にテニスコートと時間の打ちあはせをしたわけでなし、十分や廿分待つてやつたつていゞぢやないの？」

奥さまは、サンドキツチやチョコレート、赤いポストンバッグに詰め合はせ乍らおつしやつた。利イ坊さまは日曜の朝は必ず教會へ行くのであつた。いゞ子になるために。

十時半がポーン、と鳴ると同時にガラ／＼と御玄関のジャリ道をかける音がして、利イ坊さまが頬ペタを眞赤にしてとびこんでいらした。

「あゝ、恥しかつたア、はづかしかつたわ、あたくし——」

鼻の頭に小さな汗の粒がついてゐる。

「何だい？」運動シャツの上に薄いスエターを着ようと頭からひつかぶり乍ら修三さまがきいた。

「あのね、お食さんにあたし、お金あげて來たの……」利イ坊さまは呼吸をきらしてゐる。

「何だい、つまらない事して來たなア。いくらだい？」スエターの裾をひつぱり下し、サテ、と壁にかゝつたお父さまゆづりの運動着を手にし乍ら修三さま。

「いくら、つて？ あの、一錢、だわ」

「アハハ……それがそんなにドキ／＼する程一大事件かア……。いゞとこあるなア。ところで早くしろよ。もうピクニックには行かないのかア」

「行くわヨ」利イ坊さまはあはてて茶の間の奥さまの所へバタ／＼とかけて行つた。

「ねエ、お母さま、あたくしね、教會の前のあのピッコのお食さんに、今日思ひきつてお金を

あけて来たのよ」利イ坊さまの聲。

「又居たの？」と奥さまの聲。

「え、いつも教會へ行くと居るの。とても可哀相ね、地べたにピッチャリ坐つて……」

「皆さん、あげるの、お金を？」

「エ、可哀相な人はあはれんでやんなきやいけませんつて、教會の先生がおつしやるんですもの

……」

「オイ、利恵子、行つちまふぞオ……」

修三さまがじれつた相に大きな聲でどなつた。赤いボストンバッグをブラ下げて、クリーム色の春の洋服にきかへた利イ坊さまが、蝶々の様にとんで出て来た。

「サテ、いよく御出發といたさうかな」

修三さまを真中に利イ坊さまとチビ君は、「氣をつけてね。夕方暗くならない中に歸つていらつしやいよ」と奥さまに送られて門を出た。

二

郊外電車に乗つて幡ヶ谷と云ふ驛で降りた。日曜日でおまけにポカ／＼とあた／＼かい春日和なので、澤山の人が乗つたり降りたりする……。

「エ、さてと、こゝより驛の前なる道を左にすゝむ事約二丁、それより新築二階家の角を曲り左に一丁、夏は氷屋、冬はヤキイモ屋なる駄菓子屋の前をナ、メに右に曲り、橋をわたり、右に一丁、大きな原あり、その原を縦断してお風呂屋の煙突を目的にすゝむこと半町、こゝの間はおほむね道わるし、か。それから、バスの通ふ舗装道路に出、それに添つて半町、先程の川のつゞきの小川あり……ハテ、やゝつこしいね、わけがわかんないやア」

修三さまは、小岩の叔父さまの書いて下さつた、テニスコートへ行くまでの道順の地圖をひろげて、首をひねつてゐる。

「ピクニツクするみたいいな道ぢやなささうねエ」利イ坊さまは心配さうである。

「マア、行つて見よう」

修三さまが先に立つてグン／＼歩き出した。

驛の前の道を二丁ばかり行つた。そこで新築の二階家があるわけであるが、ないのである。二階家は澤山あるが、皆新築ぢやない。

「一寸伺ひますが、こゝいら邊に新築の二階家ありませんか？」修三さまは八百屋さんのおかみさんにきいた。

「ないねエ、こゝいらはもう皆建つてから四五年だアね、五年前だつたら新築だつたらがね」おかみさんはニコリともしないで云つた。

「いけねえ。ごもつともだ。この地圖は叔父さんの五年前の記憶だア」

修三様は首をすつこめた。さう云へば五年前に、叔父様は幡ヶ谷から小岩へ御引越しなされたのである。

「えれえことになつたぞ」

修三さまは地圖の紙きれをもつて、さも困つたみたいにチビ君たちの顔を見た。

「行かれなくなつちやつたのオ？」利イ坊さまはベソをかきさう。

「地圖通りには行かれなくなつたのさ。だけど行くさ。どうせこの邊だもの、どうにか行けるさ。さ、進軍！」

それからが大變であつた。さも心得た様に修三さまは左に曲り、右に曲つて行くのだが、いつまでたつても景色のいゝ原つばもなけりや、目的のお湯屋の煙突もない――。

「お湯屋の煙突はもう少し高くしなけりやいかんね。遠くから見えん様では道しるべにメイワクするよ」

小手をかざして見て、何處にもそれらしいものがないので、修三さまはこんな事を云ふ。

ポオ――！ 正午のサイレンがきこえた。

「あら、お晝だわ」利イ坊さまは情けなさうである。チビ君も今朝は胸が一杯で少ししか御飯がたべられなかつた上に、さつきから一時間も歩いたのでお腹がグウ／＼云つてゐる。

「我まんしろヨ。こんな道の真中でバスケットのお辨當がひらけますか……そらもう少しだ、行けエツ！」

グン、グン、歩く――仕様がなから二人はつゞく。利イ坊さまはソロ／＼お口のあたりが何

とか云ふお魚みたいにフクれて来た。

「ヤ、川だぞ！ シメく。寶の山は近づいたぞオ！」

「原つばはどうしたんでせう」利イ坊さまはお辨當をひらいて楽しくピクニック気分を味ふ事が出来ないのが不服らしい。川の向方は原つばでなく、バスの通つてゐるらしい舗装道路である。

「原つばは最早、住宅地にでもなつちまつたんだらう。もう五年も前の原つばぢやね」

その道をグンく歩いた。一丁、二丁、三丁、どこまで行つても地図にある様な、幡ヶ谷の火葬場入口、と書いた札が立つてゐない。

「火葬場の入口を曲つてすぐなんだつてさ」

「火葬場のそばなんて、いやアね」

利イ坊さまはさも氣にくはないみたい。チビ君も何だか氣味がわるくなつた。

道傍にタバコ屋兼コオヒー店の様な家があつた。

「私、もうとてもお腹がすいて、くたびれて……」

利イ坊さまはチラリとそつちを見乍ら訴へる様に云つた。チビ君もとても咽喉が乾いてゐた。

「エ、イ、弱音をふかすに行くんだ、行くんだ。あるよ、必ずあるさ、必ずこの近所に存在してゐるんだヨ。コートへついたらコート番人のところで幾らでも水でもお茶でものましてあげるよ」前を風の様に通過して大きなバスが二三間先に止つた。

「火葬場口でございまアす」女車掌の聲がきこえた。

「ヤ、火葬場口、ありがたい！」

なる程目の前の橋のところには「火葬場入口」と立札が立つてゐた。

「ヤレく、来ましたヨ、御苦勞様」

チビ君はホツとした。そして（もうこの上は一足も歩けないわ）と思ふと同時に（やつぱり修三さまは偉いわね、いつまでも辛抱がよく熱心に探してたうとう探しあてたんですもの……）

と、何んでも物事をおしまひまでやり通す修三さまをえらいと思つた。クタククにされたのは少し弱つたけど。

ところが、利イ坊さまはくたびれたのと、楽しみにしてゐたきれいな原つばを通つて來なくて、すぐ自分に用のないテニスコートへ來たのとで、スツカリ御機嫌なゝめとなつて了つた。

火葬場の手前の道を一寸曲つて、すぐテニスコートがあつた。番人の小父さんに頼んでお茶をのませてもらった。そしてコートの方へ案内してもらつた。

「ヤア、相当荒れてゐたんだナ」修三さまは両手を腰にあてて眺めまはした。

「さうですとも、あんた。こゝ四五年つてもものは一度も使はないんですからね。……昨日、やつとローラアをひいたんですよ」番人の小父さんは煙管をプカクやり乍ら云つた。

ネットを張るのが大變だつた。金具がさびついてキイともグウとも云はない、てんで動かないのである。ヒモやナハで無茶苦茶にネットをしばりつけた。眞中がダランとさがつてゐる。ネットもいゝ加減茶色になつてゐる……。コートの境界線のまはりには雑草だらけだ。それでも修三さまとチビ君は今までの疲れを忘れてセツセと準備をした。

準備がすんで番人の小父さんのとこへ歸つて來ると、ムツツリした顔で利イ坊さまがサンドキツチをたべてゐた。

「あれ、もうやつてゐらあ」修三さまがさう云つて笑つたが、利イ坊さまはニコリともしない。

「玉ひろひたのむぜ。名選手が二人そろつてるんだから……」

御辨當がすんでから、ラケットをもつてふり乍ら修三さまが云つたが、ニコリともしない。チビ君がおすしのカラを片づけてラケットを取らうとすると、ジロリとにらんだ。思はずヒヤリとして、チビ君は新しいツル／＼したラケットの柄をギユット握んだ。

三

四月の末とは云へ夕方になると風が少うし寒い。ホームランテニスの競争で汗ビツシヨリになつて了つた修三さまとチビ君は、やつとラケットを放り出して、雑草の上へゴロンところがた。しばらくすると、汗にぬれた體に通る風がヒヤヒヤと感じられて來た。

「ヤレ／＼、半日ばかりで探しもとめて、やりはじめたと思つたらもう御歸宅の時間か……。ただいらくらか打てる様になつたね、今度の時はもつと上手くなるよ」

修三さまは頬ベタを眞赤にして汗をふいてゐるチビ君を見乍らニコ／＼として云ふ――。チビ君はうなづき乍ら、又今度の日曜日の楽しさを思つた。

「利恵子はどうしたんだろ、さつきまでブツクサ云ひ乍らこゝに居たのに」

利イ坊さまはフクれてゐて、たつた一人ぼつちでは何にもする事がないので、仕様事なしにコートの傍へ来て時々ボール拾ひをしてゐたが、修三さまにさう云はれて見ると姿がない。大さはぎで又ネットをはづしてグルグル巻きにして、番小屋の方へもつて行つた。そして顔と手を洗つて上着を着てゐると、そこへヒョコリと利イ坊さまが姿を現した。心もち頬をあかくしてゐる。「どこへ行つてたの？」修三さまはきいた。

「あゝ、恥しかつた」利イ坊さまは目ばたきしながら云ふ――。

「何だい、又恥しかつたのかい？ 今朝家を出る時にもそんな事云つてたぢやないか、教會の前の乞食にお金をやつたとか何とか云つて……。アハハ」と修三様は笑つた。

「又、あけて來たの！」

「エ？ 又あけて來たア？」頓狂な聲で修三さまは目を丸くなさる。

「エ、火葬場の門のところに、居たの。あの教會のお乞食さんが……」利イ坊さまは半分恥し相、半分得意相である。

「同じ乞食がア？」

「エ、ピッコなの、滿洲事變で足がまがなくなつちやつたんですつて……お金を入れる箱にここに書いてあるの」

「それで又一錢やつたのかい？」

「ウウン今度は五錢。だつて一錢玉がなかつたんですもの」

「皆やつてるのかい？」

「エ、火葬場へ來る人は大たい……」

「いゝ商賣だね、朝は子供の集る教會の前、晝間は火葬場の門のところに……中々合理的な手法でアルワイ」――

修三さまはニヤ／＼笑つていらつしやる。――チビ君はわけがわからない。可哀相なお乞食さんにお金をめぐんであげた利イ坊さまの行爲は、威張り屋の利イ坊さまにしてはメツタにないよ事だと思ふし、それに自分だつてもしそんな可哀相なお乞食さんが目にとまれば、きつとお金をあげるにきまつてゐる。それをどうして修三さまはあゝ云ふ、一寸から馬鹿にしたみたいなのをかしくてたまらないみたいなの顔をなるのだらう。

番人の小父さんに別れを告げて三人はテニスコートを出た。歸りは幡ヶ谷の驛まで實にすぐ出て了つた。どうして来る時はあんなにまごついて来たのだらう、とをかしい位だつた。

「利恵子、いやにだまつてるね」道々あんまり利イ坊さまがツンツンとしてゐるので、修三様は顔をのぞきこむ様にして云つた。

「だつて、お兄さんたら、私のしたいゝ事をけなしてばつかり居るんですもの」

「乞食にお金やるのはいゝさ。可哀相だと思つたら可哀相でなくしてやらうと云ふのは結構さ。

だけどね、一日に六錢も乞食にやるより、一度でもそのポンとふくれるのを止めるよ。その方がよつほど君のためなんだよ。自分の事も出来ないのに、人のお世話はしなくてもよろしい。まして一日に二度もやるなんて。君は面白いんぢやないかい、お金をやるつて事が……？ 可哀相だと思ふ事と面白くてお金を放つてやるつて事はちがふんだよ」

こゝまでお説教して、ヒヨイと見ると、利イ坊さまはボロボロ涙をこぼしてゐる。(こりやいけねえ) 修三さまは(利イ坊には少うしむづかしいお説教だつたナ)とお思ひになつた。

「いゝんだよ、いゝ事をしたよ、おかげ様でその乞食は成金だ。オイ、利恵子、その乞食、今に

君みたいな親切な子供がセツセとお金をくれるので貯金して大金持になるよ。さうなんだつてさ、乞食の中にはね、とても立派なのがあるんだつて……」

「ウソよオ」利イ坊さまは修三さまのおどけた調子につりこまれて思はずさう云つた。

「本當だつてさ、乞食商賣に出ない時には家でラデオきいてるんだつて……」

「いやなお兄さんつたら！」利イ坊さまは笑ひ出して了つた。

「おいしいものをたべてるのさ。だつてさうぢやないか、雨の日も風の日も寒い地面に、はひつくばつてゐるんぢや一ヶ月ともたないさ、すぐ死んぢやふ……」

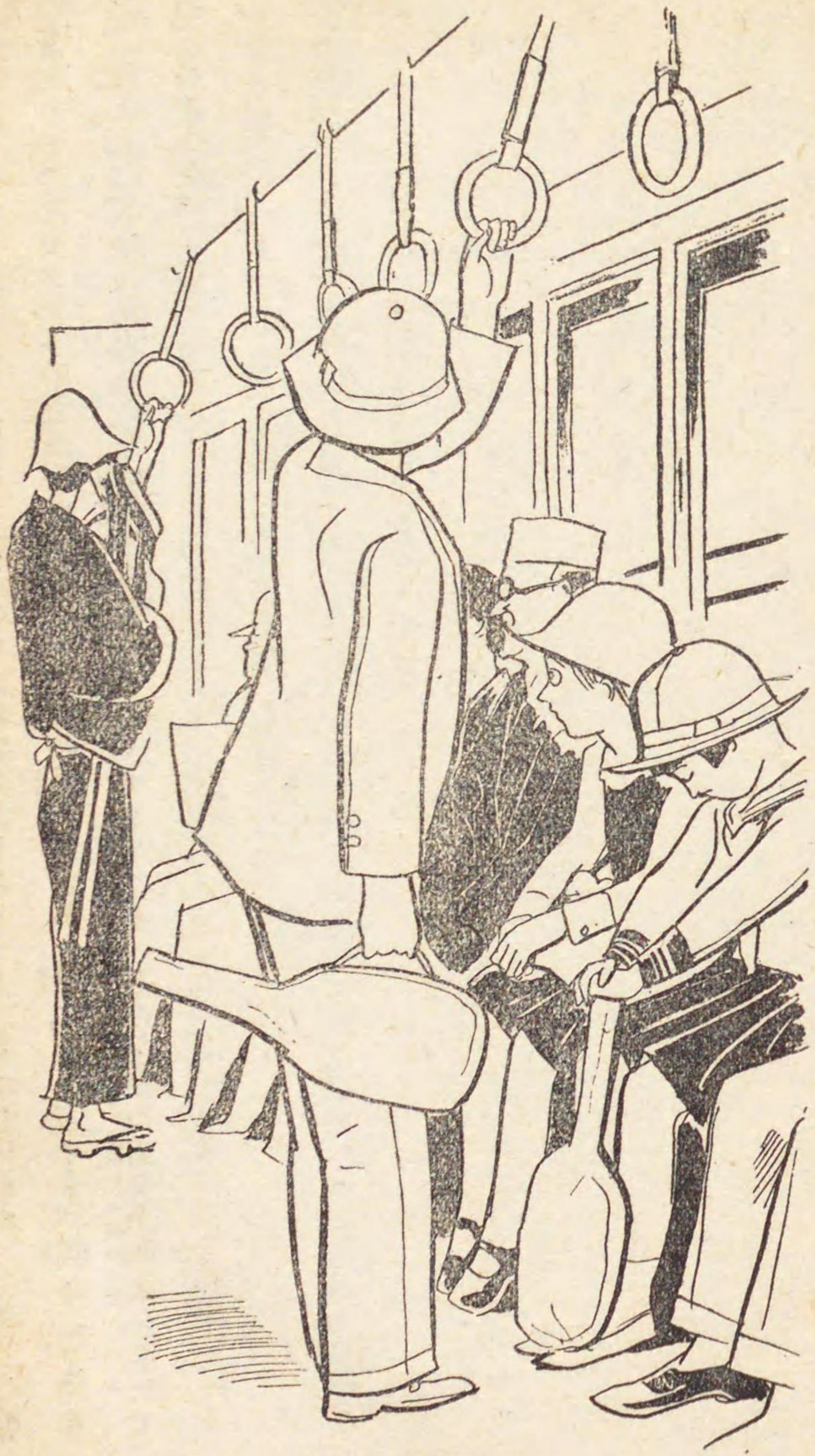
「あのピッコのお乞食さん、もう半年位も教會の前に居たのよ」

「ホーラ、さうだろ。乞食をしてゐない時はピフテキをたべて英氣を養つて」

「ウソだわヨオ」利イ坊さまもチビ君も修三さまのあんまりとんでもない様な話に、思はず大きな聲を出して笑つて了つた。利イ坊さまの御機嫌も何時の間にか回復してゐた。

驛へつくと、ポツと、赤い電氣がついた。

「あれ、もう六時半か」修三さまは腕時計を見乍らおつしやつた。出がけに「あんまり暗くなら



ない中にお歸んなさいよ」と奥さまに云はれて来た事を思ひ出したのであらう。

切符を買つてプラットホームに待つてゐると、赤いヘッドライトをてらして電車が迂りこんで来た。

「アラ、兄さま」聲をひそめて利イ坊さまがさゝやいた。その目は今後から乗つて来た男の人を目配せしてゐる。(これ、あのお乞食さんよ!)と。汚いヨレヨレの恰好をした男の人。一目でお乞食商賣の人と知れた。

(フーン、これが、その利イ坊御ヒイキのお乞食さまか!)

修三さまは、問題の主たるその乞食を眺めた。松葉杖はもつてゐるが両方の足はシャンとしてゐるのである。

(朝は教會。晝間は火葬場。これから新宿あたりへおでかけかな。中々乞食商賣も忙しいね!)
微笑をもつて修三さまは眺めてゐる。

(お乞食さんが電車に乗るなんて——)

チビ君はをかしいやらビックリするみたいである。

（お金がないからお食事さんをしてゐるのではないのかしら……？ をかしいわね……修三さまのおつしやつたピフテキや立派なお家や、ラヂオの事、まさかと思ふけれど……。利イ坊さまは、何と云つていゝかわからない様な表情で、時々チラチラと、その乞食の方を上眼使ひに見てゐるのだつた。

石の塀の家

—

「エ、とオ、皆さん、月謝を出して下さアーい」

お辨當の後でお週番の戸田さんが、教壇に立つて云つた。お週番と云ふのは、お當番の監督ばかりぢやない、かう云ふ「集金屋」もやらなければならぬ。

ガタゴトと皆はお机の中へ手をつつこむ——大きな茶色のハترون紙の月謝袋を、お修身の本の間から、歴史の本の間から取り出す、机の脇の釘にかけたピロオドのカバンの隅つこから出す人もある。

「有田さん、ハイ。秋元さん、ハイ……」

戸田さんは月謝表をとり出して一々印をつけ乍ら袋を受け取る。間ちがひのない様に、組中の人の名を書いた表に一々シルシをつけて受け取る。これはズツと前から此の組だけやつてゐる中々正確な方法である。

「高木さん……エ、まだ？」

高木さんのところへ来ると、戸田さんは一寸（仕様がな忘れん坊ね、又忘れたの）と云ふ顔つきで教壇の下に恥しさに立つてゐる高木さんを見下した。高木さんと来たら大抵毎月一度は忘れる事にしてゐる。一度目で持つてきては損みたいにきつと忘れて来るのである。今日も又例の通りで、眞赤な顔をして何か間の悪い事をしたイタヅラ猫みたいに、首を出して眼をクルクル廻してゐる――。

「ぢやア明日きつと持つてきてよ、いゝことオ？」

戸田さんは高木と書いた名の下へ×をつけた。

「田坂さん、ハイ、千野さん……ハイ」

アイウエオ順で、皆が納めに行く――。

「和島さん……」

一等おしまひの和島さんと呼ぶと、和島さんは、お机の前で立上つて「忘れました」と云つた。

和島さんは色の白い人である。それが氣の毒なみたいに眞赤になつてゐる。

「今月は二人よ。先月は四人でしたから成績はいゝ様です。けれども毎月忘れて来る事にきまつてゐる人が居ます。この人は少うし氣をつけて下さい……」

戸田さんは先生みたいな口調でゲン然と云つた。

皆が高木さんの方を一齊に見た。高木さんは眞赤になつて下を向いて、口から長いものをペリ口と出した。

「今日忘れた人は明日必ず持つて来て下さい」

再び、ゲン然と云つて戸田さんは、教卓の上の月謝袋をまとめて、教員室へもつて行つた。

その翌る朝、高木さんはチャンと持つて来た。それでもまだ危く忘れさうになつたと見え、出掛けにでも慌ててお母さんから渡されたのであらう、お辨當と一緒につめこんで来たものだけ

ら、お辨當の卵のおツユがしみ出して、ハترون紙にベツトリくつついて了つた。黒く地圖みたいにシミになつてゐる。

「あゝ、卵くさい！」

それを嗅いで見て高木さんは鼻をしかめた。チビ君も嗅がしてもらつた。甘つたるいおいしさうな匂ひがする。二人は顔を見合はせてキユウ／＼と聲をたてて笑つて了つた。

所が、和島さんは又持つて來ないのである。高木さんが「一緒に教員室へ出しに行かない？」と云ふと「私、又忘れたの」と云ふのである。

和島さんは一年の二期には副級長までした人である。とても頭がよくて、落ちついてゐて、病身らしく弱々しい所があるけれど、何でもキチン／＼とやつて行く人である。

それが二度も忘れるなんて。

チビ君は親友ではなかつたけれど、和島さんとはよく一緒だつた。和島さんのお父さんは何とか云ふ大きな會社の重役さんで、チビ君の御家からも二丁ばかり行つた、大きな立派なお家ばかりある住宅地の中でも、特に立派なお邸が、和島さんのお家である。シヤレた石を龜の子型に

たゝんだ低い塀があつて、蔦とか云ふ小さな葉つばが、まるで繪にかいてあるみたいになつたりついてゐて、お家は眞白な西洋館で、お家の横手にはテニスコートがあつた。いつだか一度、和島さんのお姉さんが毛糸を買つて下さつて、それを肩けに行つた時、和島さんが出て來て無理矢理に「遊んでいらつしやいよ」とひつぱりこんだ。眞赤なビロオド張りのソファと云ふチンボツする大きな椅子に腰をかけて、「これネ、インド紅茶なのヨ、セイロンから送つて來たのよ」と、修三さまのところでも未だいたゞいた事のないおいしい紅茶をのまされた。學校では少うしツンとした意地つぱりみたいな人だと思つてゐたが、その時の和島さんは、元氣で朗かでもいゝ人だつた。(こんな立派なお家に住んでさぞ嬉しい事ばかりだらうナ)と、チビ君は大變羨ましい様な氣がした。

それ以來、チビ君は何となく和島さんに近寄りたくて仕様がなかつた。あんな立派な家に住んでゐる和島さんと仲よく遊べたら随分得意だらうと思つたのである。

和島さんのグループは級長さんとか、それから數學では學校一と云はれる石井さんとか、お兄さんが二人とも二十三で帝大を卒業したと云ふ頭腦優秀な血をひいた三上さんとか……そん

な人ばかりであつた。お家も皆、何々博士だとか、何々大學教授、代議士……と云ふ様に、きつと和島さんと同じ様に立派なお邸をもつてゐるであらう、と思はれた。

たゞ一ツ、チビ君が和島さんと一緒にになれる時があつた。それは通學の往復だつた。そつちの方へ歸るのは二人切りだつたので、歸りは大抵一緒に歸れるのであつた。

それだけでもチビ君はとても光榮だと思つてゐた。お家の前まで來ると、サヨナラと云つて和島さんは後もふりかへらず行つて了ふ……たゞそれだけでも、チビ君は嬉しくつてたまらないのだつた。

「私、きらひさ、あの人。何だかとても威ばつてるぢやないの。家は白十字のパイでなきやたべないのヨ、とか、洋服は大てい横濱の外人の店でこさへさすのヨ、とか、何だかホラばつかりふいてるみたいヨ。こないだだつて、あのイカリのプロオチね、あれを石井さんに、銀座で買ったのよ、つて云つてたわヨ。あなたンとこで買ったんぢやないの、ネエ……」
高木さんは、和島さんがムシがすかない様である。

だから、その和島さんのお父さんが歿くなつた時、一番にチビ君に注進したのは高木さんである。

和島さんのお父さんはたゞの歿くなり様ではなかつた。何かよくない事をして警察に招かれてそして調べられてゐる間に急に歿くなつたのだ相である。新聞にも出た。お父さんの顔が大きく出てゐた。

つゞいて長い間病氣で床についてゐたお母さんも歿くなつたさうである。それは去年の冬の事であつた。

後には女子大を出た大きいお姉さんと、この學校の四年に居る小さいお姉さんと和島さんと三人切ださうで、他に何にも親類がないと云ふ事だつた。

「そいでね、とても澤山なシャクザイがあるんですつて。シャクザイつて、借金のことよ。あんな威ばつたホラばつかり吹いて、をかしいつたらないわネ。私とこなんか借金なんかはないわヨ」

高木さんは痛快みたいに云ふのだつた。

少うし癩にさはる時があつた。借金がなくなつて、(あんなに澤山ウジャ〜と小さい弟や妹が居てはたまらない)と思つた。(あそびに行つたつて御馳走のお汁粉の中へ指をつつこまれたり、アメだらけの手で顔をいぢられたり、たまりやしないわ)と、變なところまで癩にさはつて、一生懸命に口をとんがらかして喋る高木さんをニラんでやつた事もある。

和島さんは相變らず忘れて來た。三日目、四日目、五日目にはたうとう教員室へ呼ばれた。

その翌月も、又忘れて來た。今度は高木さんも珍らしくチャンともつて來たので、和島さん一人が×をつけられた。

「あのお父さん、借金をしてたでせう。だからその借金返しちやつたらお金がなくなつちやつたんぢやない? そいで月謝が出せないのよ、きつと——」

或日、高木さんがまことしやかにさう云つた。(シツレイな事を云ふと私が承知しないわヨ)と云ふ顔つきでチビ君は高木さんをニラんだ。どこからさう云ふ色々々の事をきゝこんで來るのであ

らう……。組中のニュース係と云ふ綽名をつけられたのも無理はない。

(そんな事云つたつて、今迄通りあの立派なお家に住んでゐるし、チャンと學校へ通つてゐるぢやないの……)チビ君は四年生の和島さんのお姉さんの、繪から抜け出たみたいにきれいな様子や、相變らずグループの中で女王さまの様にふるまつてゐる和島さんを、昔通りのお金持の和島さんと思ひたかつた。

「四年の和島さん、學校をお下りになつたのヨ」

と云つたのは、和島さんのお姉さんに夢中になつてゐた國方さんと云ふ人だつた。チビ君や高木さんが花崎さんと云ふ人に夢中になつてゐる以上に國方さんは、和島さんのお姉さんに熱中してゐた。

その事をきいた時、チビ君はギクンとした。けれどもどうも和島さんに「どうしてお姉さんお止めになつたの?」ときく事が出来なかつた。

いつもの通り電車に乗つて同じ驛で降り、チビ君のお家の前で「サヨナラ」をし、スタ〜

と、和島さんは行つて了ふのである。あの、石の堀のお家のある住宅地の方へ！

三

「あのネ、こゝへ行つて見ないこと？ ととても可愛いんですつて……！」

戸田さんが一枚の廣告ハガキを見せた。

子供用品展覧會、と云ふのである。場所は銀座の或絹織物會社の出張所で、その四階の陳列場で帽子から洋服、靴まで一切のものが展覧されてゐる。そして手藝の先生もおつしやつたペインテックスやフランス刺繍の實演もある、と云ふのである。

その翌る日、チビ君、高木さん、戸田さん、國方さん……等は、お家の許しを得て歸りにその展覧會を見に行つた。

銀座などに馴れないチビ君等は、ツル／＼すべる場内の階段をふみ外したり、ちがふ陳列場だと思つて事務所の中へツン／＼入つて行つて了つたり、その度に一年としの多い戸田さんに怒られ乍ら、それでも可愛い色んな子供用品を堪能する程見物した。

「私、一寸御不淨へ行つて来るから待つてね」一等階下へ来るとかう云つてバタ／＼と高木さんと國方さんが行つて了つた後、戸田さんは陳列場の片隅のガラス臺の上のフランス人形を眺めてゐた。チビ君ははじめて入つたきれいな、お晝でも電氣の恍々ともつた立派なお店の飾りつけにボンヤリとして了つて、何を見るつてことなしにあたりを見廻してゐた。

音もなく廻轉してゐるマネキン人形！ その廻りに飾つてある淡桃色、水色、白の軽い絹編みのスエター！ すきとほる様な薄い手袋！

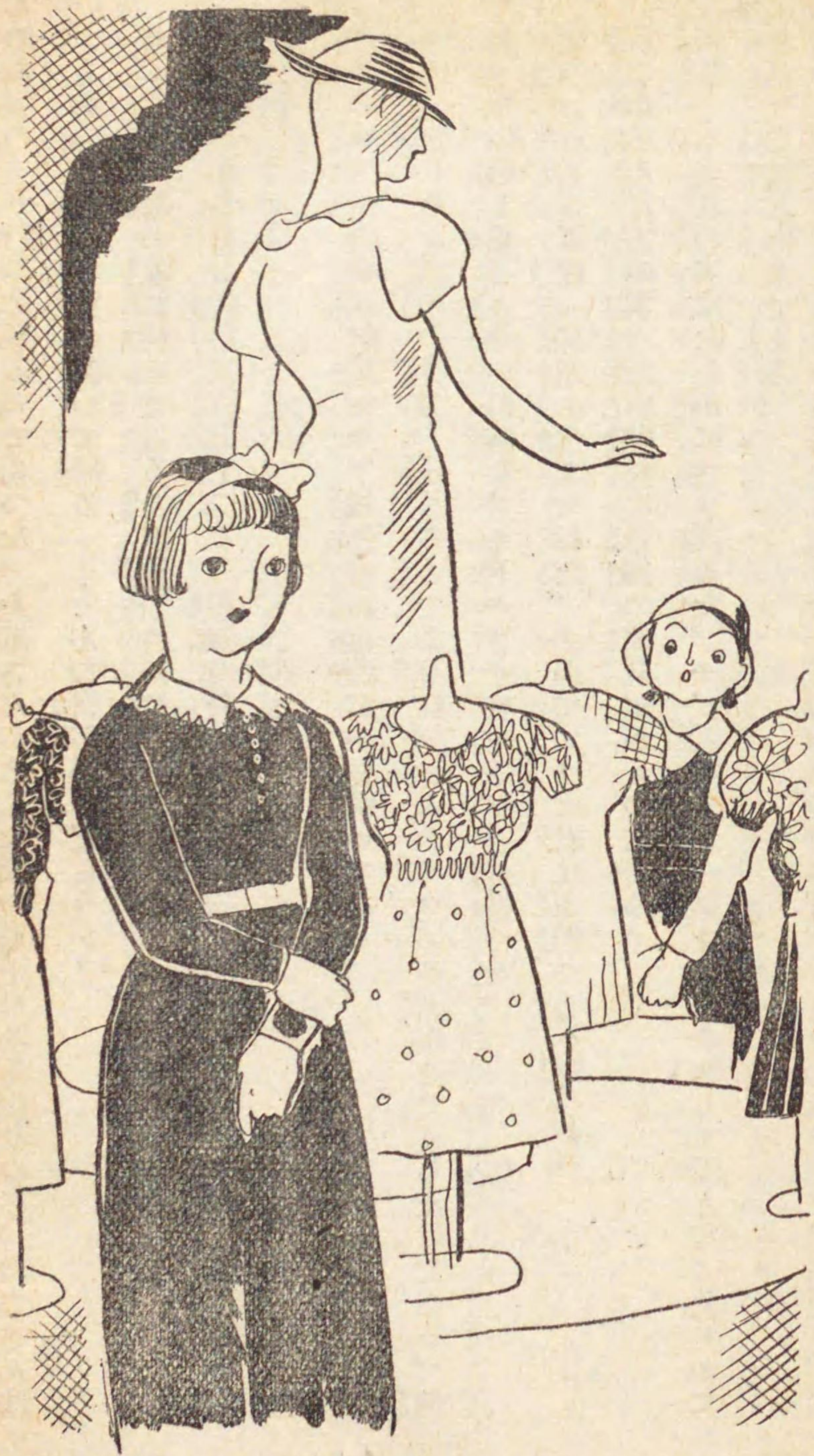
ピカ／＼光るムギワラの洒落た夏帽子をかぶつて、ツンと氣取つてるお人形！

(……?)

そのお人形の横手に立つてゐる人を見た時、チビ君はハツとした。はじめはお人形ではないかとボンヤリ見てゐたけれど……。

短い斷髪に桃色のリボンをむすんで、青色の制服を着て立つてゐる女店員の姿！ 繪に書いた様にきれいな姿である。

「お待遠様！ あゝ、びつくりしたッ。この把手をひつばれと書いてあつたから勢よく引つぱつ



たら物凄(ものすご)い音(おと)がして水(みづ)が出て来た(き)のヨ。」

「そいで私(わたし)とこどうしても止(と)まらないの……いそいで逃(に)げて来(き)ちやつた」

高木(たかぎ)さんと國方(くにかた)さんがとんで来(き)た。またいたづらをしたと見(み)え、キヤツ／＼笑(わら)つてゐる。そして戸田(とだ)さんとチビ君(くん)をせき立て(た)ててドンドン、お店(みせ)を出(で)て了(しま)つた。

歸(かへ)り、新(しん)宿(じやく)驛(えき)まで一(いっ)緒(しょ)で、皆(みな)と別(わか)れて一(ひと)人(り)になると、チビ君(くん)はさつきの事(こと)を思(おも)ひ出(だ)した。

あの人(ひと)は、あの店員(てんいん)姿(すがた)の人(ひと)は、たしか和島(わじま)さんのお姉(ねえ)さんであつた。こないだ學(がく)校(かう)をやめた四年生(ねんせい)の和島(わじま)さんである。

戸田(とだ)さんも、高木(たかぎ)さんも國方(くにかた)さんも氣(き)がつかなかつたにちがひない。

(私(わたし)一(ひとり)人(り)が見(み)たんのだ)何(なに)だかホツとした氣(き)持(もち)だつた。高木(たかぎ)さんがもし見(み)つけたら、和島(わじま)さんのお姉(ねえ)さんが銀座(ぎんざ)の洋装(やうさう)店(てん)の賣(う)子(こ)になつてゐる事(こと)は、すぐ組中(くみぢゆう)にひろがつて了(しま)ふにちがひないもの。國方(くにかた)さんが見(み)たら、お姉(ねえ)さん熱(あつ)の國方(くにかた)さんは、きつと毎(まい)日(にち)の様(よう)にお店(みせ)へ行(い)きたがるかも知(し)れないもの。

電車(でんしゃ)を降(お)りると、チビ君(くん)は自(じ)分(ぶん)のお家(うち)の前(まへ)を大急(おほいそ)ぎで通(とほ)りすぎて、一(いっ)度(ど)行(い)つた事(こと)のある和島(わじま)さん

んのお家の方へ行つて見るのであつた。お姉さんがあんな所の賣子になる程なのに、和島さんはいつもあの今迄のお家へ歸つて居る——そんな筈があるだらうか？

あんな立派なお家に住んでゐる人が賣子さんになんかなるなんて……！

砂利のしきつめられた坂道を上つて、黒塀のお邸の角を曲る。角から三軒目が和島さんのお家だつた。

テニスコートの金網が見えた。桃色の垣薔薇が一杯咲いてゐる。

シーンとしたお邸町の夕方、遠くの方でお豆腐屋さんのラツパの音がきこえるだけである。何だかコワイ物を見るみたいに胸をドキドキさせてソーツと近寄つた。

テニスコートには一杯草が生えてゐた。あわててチビ君は正門の方へ廻つた。

蔦のからんだ石の塀、低い門柱に青銅の表札がかゝつて居る。

東條——表札の字はたしかにさう讀めた。チビ君はもう一遍まばたきをして讀んだ。たしかに『和島』ではないのである。

中からカラ／＼と駒下駄の音がして女中さんらしい人が手紙らしいものをもつて走つて來た。

ビックリして急いでチビ君は歩き出した。今日は銀座の展覽會へ行つたから別だつたが、現に昨日も、歸りに和島さんはこのお家へ歸つた筈なのだ。いつもの通り、サヨナラと云つてドンドンあの今來た砂利道の方へ行つたのである。

チビ君は少うし理由がわからなくなつた。

「何か、お家でも探していらつしやるの？」

傍を通つた女中さんがきいた。あんまりチビ君の様子がおもひあぐんだ様な様子だつたからかも知れない。

「エ、あのオ、もと、あのお家は和島さんつて方がゐらしたでせう？」

ふりかへり乍らチビ君は思ひきつてきいて見た。

「エ、さうよ。こないだ、さうネ、四月のはじめでしたかね、私共が越して來ましたの。エ、和島さんのお嬢さん方はネ、たしか一丁目の、ホラ、あの、何とか云ふ洋装店があるでせう、さう／＼ハトヤ……」

チビ君はゴクリと息をのんだ。ハトヤと云ふのはチビ君のお店なのなもの。

「あの手前のね、乾物屋さんと床屋さんの横丁を入つたところ、あすこいら邊の小さなお家へお越しになつたさうですよ」

どうもありがたう、を云つてチビ君は女中さんと別れた。そのまゝ眞直ぐお邸町を行つてダラダラ坂を降りて左に曲ると、丁度、乾物屋さんと床屋さんへ出る横丁へ、反對の方から出られるのである。

(和島さんはいつも此の道を通つて歸つたのだワ)

抜け道みたいな事をしてワザ／＼歸る和島さんの氣持が、チビ君にはヤツとわかる様な氣がした。

あんな横丁にある家なら小さな古い家にきまつてゐる。

蔦のからんだ石堀の家から、そんなひつこんだ家に越さなければならなかつた氣持は、もしもチビ君が和島さんと同じ境遇におかれたら、きつと同じ様に、恥しさと悲しさでたまらないにちがひない。

チビ君にとつては和島さんがそんな小さい家へ越した事は、今迄のお金持の和島さんよりズツ

ト／＼近寄つた嬉しさを感ずるが、和島さんとしてみれば、たまらなく恥しいのであつた。

毎日々々、自分の家の前を素通りしてワザ／＼、廻り道をしてまで、もとの大きな家に住んでゐる事を信じさせようとした和島さん！今は人の家となつたもとの自分の家の前を通る時、どんな氣がするだらうか？

と、チビ君は何だか自分まで淋しい氣がして、シヨンポリと家へ歸つた。

學校では何時の間にか、和島さんのお姉さんが銀座で賣子をしてゐる事がひろまつてゐた。けれども和島さん姉妹の昔の華やかさやお父さんの死が死だけに、決して和島さんの耳に入る様には噂しなかつたものだから、和島さんは今まで通りの様に、グループの中で女王さまの様にふるまつてゐた。そして時々、まだ「大きいお姉さまのハンドバッグを作らせたら」とか「中庭の芝生がとも今年はきれいに刈れたのヨ」とか云ふのだつた。

その大きいお姉さんも、今は家庭教師をしてゐられる、と云ふ事が組中に知れ渡つてゐたのだつたけど。

ひどい土砂降りの日だった。學校を出る頃はポツ／＼だったが、チビ君と和島さんが驛へ降りた頃は物凄く横なぐりの雨となった。

相憎と先生がお休みで一時間、時間がくりあがつたので、驛にはお姉さんも兄さんも迎へに来てゐてくれなかつた。今までさう云ふ時、和島さんは驛前の自働電話をかけて女中さんが傘をもつて来るまでチビ君も待たせておいて、一緒にチビ君のお家の前まで送つてくれたのであつた。けれども今日は電話をかけるとも云はなかつた。かけようと云つてもかけられないことはチビ君にはわかつた。

「走つて行きませうヨ」

突然、和島さんがさう云つた。そして次の瞬間、二人は少うし小降りになつた様な氣のする雨の往來へかけ出した。

冷い泥のハネがビチョツ／＼と靴下の上からはね上る——頭と云はず顔と云はず、冷い雨は遠慮もなく降りつける——。

乾物屋さんと床屋さんの手前まで来た時、夢中の中にもチビ君はハツとした。

今日こそは、こつちへ歸るにちがひない——と思つた。

けれども次の瞬間、和島さんはチビ君よりも先に立つて、ドン／＼とその前を通り抜けて了つたのである。

チビ君のお家の前まで来ると、そのまんま「サヨナラ」と云ひすてて猶も走つて行くのであつた。

「傘貸してあげるわヨオ、ヨオ、つたら」

チビ君はあわてて後から大聲で怒鳴つたけれど、きこえない様にドン／＼走つて行つて了つた。横なぐりの雨の中を砂利道をかけ上つて、石の塀のお邸のある住宅地の方へ——。

チビ君は、お店の前へ立つていつまでもその姿を見送つてゐる中に、ビツチヨリ濡れたスカートの手を掴んでゐた手をはなして、ワツと泣き出して了つたのであつた。

姉さんの事件

土曜日だつた。

御飯たべたらすぐあすびに行くわね、と高木さんがさう云つたのでチビ君も大急ぎで家へ歸つて来た。

學校のひけるのは十二時カツキリで、それから御當番して電車で歸つて來るので、どうしても家に着くのは一時すぎで、家ではいつも御飯がすんで、チビ君のだけが残されてある。

「今日も、お茶の間に白いお膳ブキンがかゝつたお膳が出てゐた。」

「只今——、お母さん、御茶ななに？」

チビ君が臺所へ行くと、お母さんは流しで洗面器の手拭をしぼつてゐた。珍らしく肌脱ぎになつて居る。

「あ、お歸り。お茶はネ、そろそこのフライパン、ウン、西洋皿が伏せてあるだろ、ジャガ芋の油煎りよ、一寸あつたためておあがり——」

ガスに火をつけ乍らチビ君は、

「お母さん、どつかへ行くのオ？」ときいた。一寸もなりふりにかまはないお母さんが、肌脱ぎになつて首筋をふいたり、念入りに顔を洗つてゐると云ふのは、メツタにない事である。

「ウン、一寸ね——」さう云ひ乍らお母さんは忙しさうに手拭をパンとはたいて、手拭竿にかけるとお茶の間の方へ行く——。

温まつたジャガ芋の油煎りをお皿にのせてお膳の所へもつて行つて、御飯をつけてゐると、二階から、

「お母さん、帯あげはどつちのして行くのオ？」とお姉さんの聲。

「こないだ福引で當つたのがあるだらうがね、新しいのがいゝよ」

お母さんは肩を入れ乍らせつせと髪をときつけて居る。

「お姉さんも一緒に行くの」

「ア、一寸、修三さまのところへね。生憎とね兄さんが生地問屋へ行つちやつて。でもお晝迄には歸つて来る事になつてゐるんだから、もう歸つて来ると思ふから、初ちやん、一人で淋しいだらうけど、氣をつけてお留守をしてゐてね」

「ウン」(高木さんが来るから大丈夫)と思ひ乍ら、それでも何となくお母さんたちの様子があんなまりッハ／＼してゐて、氣にかゝる。

「修三さまんとこへ何しに行くの、お姉さんと二人で……」ときかうとしたとたん、

「お母さん、帯しめてヨ、上手く行かないのよ」と二階から又お姉さんの聲。

「一寸待つておいで、今お母さんも着物きかへに行くから……」

お母さんは大いそぎで髪をときつけて了ふと、アタフタと二階へかけ上つて了つた。

間もなく、お姉さんがトントントンと降りて来た。

(アラ、まあ随分お洒落したわネ)チビ君はびつくりした様にお姉さんを見上げた。いつも緑色

の上ツ張りを着てお店番をしてゐるお姉さんとは丸つきりちがふ。今年の春の末に縫つて以來一度も手を通さなかつた新しい文化お召とか云ふ上等ハクライの着物を着てゐる。帯もメツタにまいた事のない金の糸の刺繡のついたトンボと井桁のくづしの一丁羅である。帯上げはこの夏デパートへ浴衣やらスダレやら買ひに行つた時、福引で三等に當つたキンシヤのしぼりの桃色の帯上げである。足袋も眞新なのをはいてゐる。とてもキレイなお姉さんだ。

「一寸オ、初ちやん、すまないけどあの傘棚のパラソル下してくんない？ あんまりキュウツと帯しめちやつたらいつもよりなほ手がとゞかないのヨ、ねエ——」

お姉さんは臺所の傘棚の前で脊のびをし乍ら應援をたのんだ。

チビ君は片足をウンと食器戸棚のへりにかけ、ヒヨイと反動でとび上つてお姉さんのパラソルの筒を下した。家で、少し高くこさへすぎたこの傘棚に手がとゞくのは背の高い兄さんと、學校で體操をやつてゐるおかげで、チビではあるが身の軽いチビ君だけである。

「修三さまんとこへ何しに行くのヨ、お洒落してエ」

チビ君はお姉さんが修三様のとこへ行く用があるなんてどうしても見當がつかないのである。

「重大な用」お姉さんは一寸顔を赤くした。

「デユウダイな用つて？」

「いゝわヨ、歸つて來たらをせえてあげるから」

そこへ、これもとつておきのネズミ色の細い縞のお召の着物を着たお母さんが、二階から降りて來た。白いエプロンをかけていつも働いてゐるお母さんとは、これもズンとちがふ。

すつかりお上品にどこかの奥様みたいである。箆笥の小抽出しから黒い絹紐であんだ手提袋を出してセカ／＼と中を改めてゐる——あの手提袋をもつて行くのはよつぽどきどつた時である。

「オヤ、もう一時半すぎたヨ。二時つてお約束で、おそくなつちや失禮だからね、先様よりいらか早目に行つて色々奥様ともお話しなきやあならないからね……」

お母さんはます／＼あはて出した。

「大丈夫、圓タクで行けば結構十五分位で着くわヨ」

「さうだね、圓タクをおごらうね、別の時ぢやなし、一生一度のハレの時だものね、オホホ……」

「いやだワ、お母さん、初ちゃんが變な顔してるわよ」

ぢや、初ちゃん、しつかりお留守たのむよ——と云ひおいて、お母さんとお姉さんは走る様に出で行つた。

お店の外まで、行つていらつしやい、と云ひ乍ら送つて出て一寸後を見おくつて居たが、御飯がたべかけなので急いで中へ入つた。

大いそぎで残りの一膳をたべてお膳をしまつてゐると、高木さんがお店へかけこんで來た。

「お母さんとお姉さん、どこへ行つたの？ 今、驛の前で自動車に乗つてゐたわヨ、スゴクお洒落をして……」

高木さんも不思議さうである。チビ君はそこで、修三さまんとこへ行つただけで、どうもわけがわからない、きいても笑つてばかりゐて、たゞセカ／＼と行つて了つた事などを、口をトンガラかして云つてゐた。

すると、そこへ自轉車で兄さんが歸つて來た。

「オイ、行つたかい、お母さんたち？」

「エ、あれ一體何しに行つたの？」

チビ君と高木さんは兄さんに説明を求める様に、つめよつた。

「お見合さ」

「お見合つて？」

チビ君は一寸わからなかつた。

「アラ、イヤだ、お見合つて、おムコさんとおヨメさんがはじめて逢ふんでしょ？」

高木さんは中々よく知つてゐる。

「さうさ、だから姉さん、スゴく洒落てマンカン飾で行つたら？」

兄さんは萬事承知のスケで、嬉しさうである。

「マア、お姉さん、お嫁に行くの、アラ、素的！」

高木さんはパチ／＼と手を叩いた。

(ア、成程!) チビ君はやつと色々な事がわかつた。お母さんが夢中になつてあはててゐた事、お姉さんが今までになく念入りにお洒落をしてゐた事、先様がどうの、お約束がどうの、一生一度のハレの時だの……どうりで……。

(だけど、私がいくら何をきいても上の空で、流して、いつもはお母さんがあつたためてくれるのに今日はお菜も放つたらかして……)

「オイ、初ちゃん、どしたい、お姉さんがお嫁に行くつてきいたら、トタンに淋しくなつちやつたか？」

氣がついて見るとチビ君はベソをかいたみたいな顔をしてゐた。

三

お姉さんのお見合は上々の首尾だ、と云ふ事であつた。修三さまのお父様の知り合ひの方の弟さんで、大學を出て、今はT國生命保險會社につとめて居ると云ふ。いはゆるお母さんが常日頃から望んでゐた「大學出のサラリーマン」なのである。そのお話が修三さまのお母さまから

お母さんにされ、早速寫眞が交換された。チビ君は一寸も氣がつかなくつたが、さう云へば二週間ばかり前にお姉さんが寫眞を寫しに行つたつけ。満洲のお友達に送るんだ、とか何とか云つて、一人で行くのは何だか恥しいから、と云つてチビ君を寫眞屋までお供につれて行つたものだ。

向方からの寫眞も來たのか、チビ君が二階で勉強をすまして下へ降りて來たら、お母さんと兄さんが、

「もつたいない様だ」とか、「立派な人だ」とか云つてその寫眞を見てゐたつけ。お姉さんは傍で浴衣に水ノリを霧吹き器でかけてゐたが、嬉しさうだつた。――

「あゝありがたいネ、おかげ様でこないだのお見合はパスしたらしいヨ」

お母さんはどこで覺えたかパスなんて洒落た言葉を使つて有難がつた。ハガキが來たので修三さまのそこへ行つて歸つて來た晩である。きつと修三さまでも「オイ、小母さん、お目出度う、こないだのお見合見事パス」とか何とかおつしやつたのだらう。

「それでね、明後日の日曜、一緒に活動でも見に行かう、とおつしやるんだ相だよ」

「ホオ、そりやよかつたネ、秋坊もトントン拍子に話がすゝんで倅せだね――」

兄さんもお店の椅子に腰かけ乍ら嬉しさうである。お母さんは二階へかけ上つて行つた。時々お姉さんの笑ふ聲が明るくきこえる――。

チビ君はソツと立上つてあたりを見乍ら、筆筒の小抽出しをあげた。たしかそこには例の「先様の寫眞」が入つて居る筈である。

あつた、あつた、茶色の臺紙つきの大きな寫眞が大事相に入れてある。素早くひろげて見る。

(アラ、目鏡をかけてゐる)

(やせつぽけネ)

(アラ、ヤだ、英語の先生と同じ水玉のネクタイをしてゐるわ)

その時、お母さんの降りて來るらしい氣配がした。びつくりしてあはてて寫眞をしまふと、筆筒の前をはなれた。

「初ちゃん、あさつての日曜ね、お姉さんと一緒に行つておいで。……活動に行くんだヨ、いゝだろ」

「もうお母さん行かないの？」

「あゝ、こないだトツクリと拜見もしお話もしたからネ。それに活動ぢやお母さんごめんかうむるよ、異人さんの出て来るチイチイパツパツつてのは一寸もわかんないもの……」

——活動へ行けるのはいやではなかつたが、何だか『先様』と一緒にいやだつた。

二階へ行つて、お姉さんと床を並べて寝てゐると、急にお姉さんが、

「初ちゃん、あんた、洋服の上衣、明日向方の古い方を着て行きなさいネ、今着てる新しい方、明日洗つといてあげるから……」と云つた。

チビ君は布團の中に顔を埋めてだまつてゐた。普段から親切なお姉さんだけ何だか今夜は素直にありがたいと思へないのであつた。

四

「My mother is fond of the cinema. ハイ、こゝを譯して下さい」

英語の先生がお教室を見廻した。

「先生エ、ハイ、先生」皆が手をあげる。

「ハイ、戸田さん」

戸田さんは勢ひよく立上つて、

「私のお母さんは映畫が好きでございます」

「さう、よろし」先生はうなづいた。

「ぢや、次のセンテンス、She likes foreign films better. は？」

better が一寸つけにくらしく手をあげた人は二三人である。

「ハイ、鈴木さんは？」

「彼女は外國映畫の方をより好みます」

「さうですネ、この better は何々をもつとか、特に……と云ふ時に使ふんです……。では、

foreign と云ふのは……」

チビ君はボンヤリとして色々な事を考へてゐた。英語の先生はあの例の寫真と同じ水玉のネクタイをしていらつしやる、すぐ目の上にそれが見える——私のお母さんは映畫を好みます。特に

外國映畫を好みます……自分のお母さんの事を考へるとをかしくなる。こないだお姉さんの時に「活動ぢやごめんかうむるよ、異人さんの出て来るチイチイパツパツつてのは一寸もわからないの……」と云つた事を思ひ出した——。

「ソラ、foreign して何だ？」

突然、先生がすぐ目の前のチビ君を指した。ハツとした瞬間、クラ／＼ツとした。カーツと顔中が熱くなつた。

「わからない？ さてはナマけて辭引を引いてこなかつたナ——」

先生の聲が意地わるくきこえた。急に悲しくなつて涙が出さうになつた。

（外國の、よ、グアイコクの——）後の方で誰かがさゝやいた。

「アノ、外國の」辛うじて立上り乍ら云つた。

「さう。——だめだよ、人に教へてもらつたりしちや。何をボンヤリしてゐる——」

さう云つて英語の先生は軽くチビ君をたしなめる様にごらんになつた。

眼鏡が光つてゐる——急に何だか憎らしくなつた。

「トンボ、憎らしかつたわネ」

その時間がすむと、高木さんがさも同情したみたいに寄つて來た。トンボと云ふのは英語の先生の綽名である。細い面積の顔に大きなロイド眼鏡が光つてゐるからである。高木さんは英語なんか一番下手だからどうもトンボ先生は苦手だ。チビ君も他の學科に比べると英語はあまり得意でないから、あまりトンボ先生は好きではない。

トンボ先生に似てゐるからお姉さんの『先様』はあんまり好かない。

そこへもつて來てお姉さんの『先様』に似てゐるので餘計トンボ先生がいやだ。

こないだの日曜日、お姉さんの洗つておいてくれた、キレイに念入りにアイロンをあてた上衣を着て、お姉さんと一緒に『先様』と映畫を見に行つた。

見れば見る程トンボ先生とソツクリである。

「H劇場とI館とどちらがいゝですか？」ときいた。お姉さんは「どちらでも」と云つた。「妹さんは？」と云ふとお姉さんはあはてて「いゝえ、これなんて何でもよろしいんですの」と無茶苦茶にケンソンして了つた。西洋物ばかりの映畫館へ行つた。何だか、お母さんぢやないけど異

人さんの出て来るチイチイパツパは一寸も面白くなかった。半分位でもう頭がガン／＼して来て了つた。プログラムを見ると「漫畫ベテイの冒険」と云ふのがあつたから、ベテイと云へばいつでも學校で活動通の戸田さんたちが、面白がつてゐるから樂しみにして居た。すると丁度その前の映畫が終ると『先様』が「もう大分おそいですから出ませうか？」と云ふと、お姉さんは「エエ」と云つた、だもんでベテイを見のがして了つた。

御飯の時もさうである。

「日本食と洋食とどちらにませう？」と云ふと又してもお姉さんは「どちらでも」と云つたもんで「あなたは？」と、チビ君の方へ來た。さうするとお姉さんは又あはてて「此の子は何でも結構なんです」と云つたので、洋食になつて了つた。ナイフとフォークを使つてたべる洋食なんてものはチビ君は苦手で、一寸も食へた氣がしなかつた。お姉さんだつてマゴ／＼してゐたくせに。

歸りも、自動車で送つてくれると云ふ、自動車に乗ればチビ君がきつと酔つて氣持のわるくなる事知つてゐるくせにお姉さんはすまして乗つて了つたのだつた。案の定、十分も乗つてゐない中

にチビ君は蒼くなつて了つた。『先様』は心配して「降りませうか」と云ふのにお姉さんは「いえ、よろしいんですの、大丈夫ですワ、ネ、大丈夫ネ、我まんできるわネ」と無理矢理におさへつける様に云ふので、家へ着くまでの甘分間のツラさと來たら……。

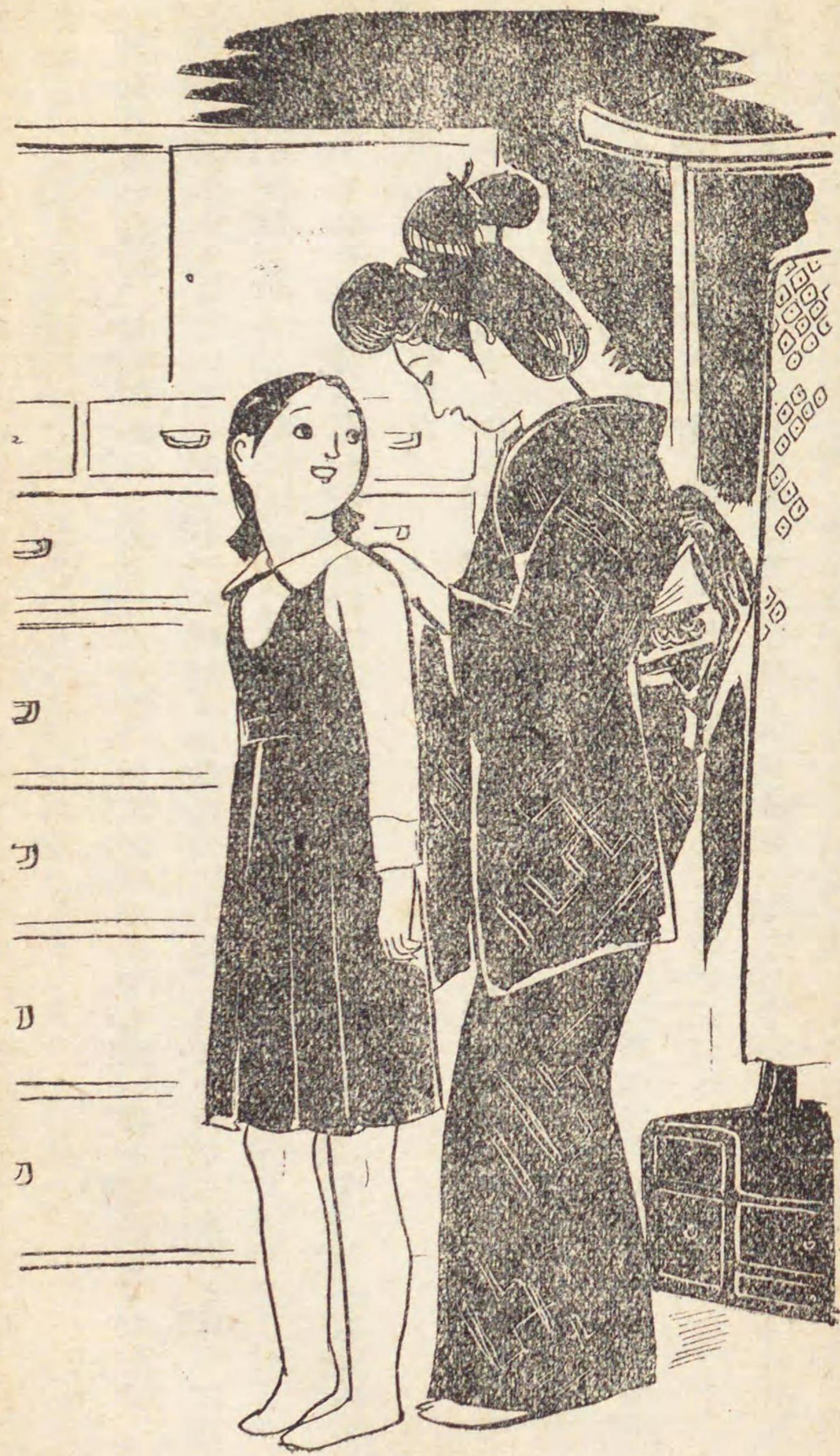
本當に癪にさはる——何でもかんでもお姉さんが『先様』大事にするのが口惜しい。そしてそれと同時に、今まで妹思ひだつたお姉さんをさうさせる『先様』がヤタラと憎らしくなつて了ふのである。

五

お姉さんが島田に結つた。この頃の流行の様に毛を短くしたりしてゐないお姉さんだから、帯の下まである澤山の毛でラク／＼と立派な島田が結えた。

お母さんは忙しくなつた。お姉さんの着物を買ひに行つたりそれをセツセと縫ひ上げたり、その中に新しい簞笥や鏡臺などが並んだ。二階の六疊の部屋はお姉さんの支度で満員になつた。

「初ちゃん、向方むきなさい」



もう一週間経つたらお嫁に行くと言ふ日である。お姉さんはチビ君を向方むかして身體の寸法を取り出した。もうすぐ學校の制服は冬服にかはる。この春まで着てゐたのはもう小さくて着られない。今までは冬服も夏服もみんなお姉さんがミシンで縫つてくれたけれど、今度の秋はお姉さんがお嫁に行つて了ふ。その前にチビ君の新しい冬の制服を縫つて行つてくれる、と言ふのである。

「随分大きくなつたわネ、もう肩巾なんてさう當り前の子とちがはないわヨ」

「さうオ」

「ウンとタツプリこさへておくわネ。でもその中にお姉さん、又落ちついたら何でも縫つてあげるわヨ。丁度この冬服だけゴタ／＼とぶつかるから、今大急ぎでこさへちやふんだけど……」

「作れる？」

「何で？」

「だつて忙しいんぢやないの」

「大丈夫ヨ、こんな簡単なジャンパー、丸一日ありや出来るもの……それにもうお嫁に行つちや

ふんだもの、何でもお姉さんの出来る事ならして行つてあげるわヨ、何かもつとある？」

お姉さんは又もとの親切に、否、もとの以上の親切である。

何だかこないだ中、無性にお姉さんを恨んだり、憎んだのがとても悪い様な気がして来た。

私の事なんかかまはないで『あの方』にばかりお世辭ついて、ひどいお姉さんだと思つただけ、やつぱりお姉さんはこんな妹思ひで親切なんだわ。

だけでも、もうそのお姉さんもお嫁に行つちやふんだ——さう思ふとチビ君は、何とも云へない悲しさと淋しさにおそはれた。

その夜おそく迄、お姉さんはお店の奥まつたミシンの前で、チビ君の紺のジャンパーを縫つてゐた。

チビ君はお母さんの傍でお裁縫をしてゐた。お姉さんがお嫁入りに持つて行くお支度の中の帯である。お姉さんが自分の洋服を縫つてくれるから、せめてもの御恩がへしである。

「先様ぢやネ、ほんとに喜んで下さつてゐるのよ。とに角お母さんて方が早くからいらつしやらないのでネ、お父さんも一日も早く好いお嫁さんがほしいんだ相でネ、マア家の秋子はそんな事

云つちや何だけど、お裁縫も洋裁も一人前以上だし、満洲でお父さんを手傳つてゐた頃は家の切りまはしもスツカリしてゐたのだからネ……あの方と来たらもうとても大喜びで……」

兄さんにお母さんが又嬉しさに話してゐる。

チビ君はあの方の事を思ひ出した。何だか今夜はあんまり憎らしくなかつた。お姉さんがやつぱり自分に親切だと云ふ事がわかつたからかしら？ それと又も一つ、愈々お姉さんの嫁く日が迫つて来て、お姉さんのダンナさまなら自分のもう一人のお兄さんになるのだ、と云ふ感が強くなつたせゐかしら……？

「あ、それからネ、あの方もよく氣のつくいゝ方ぢやないか、こないだいつだつたか活動へ行つた時の歸りね、初ちゃんが自動車に乗つて氣持悪くした時のことね、とても氣の毒がつていらつしやつたんだよ、あの時は僕たちばかり勝手をして妹さんに本當にすみませんでした。それでね、こんどお妹さんがお嫁にいらつしやる時は、僕たちをどんな目にも逢はして下さい、つてさ。どんなギセイをはらつても御恩がへしはいたします、だつて……ホホ……」

「アラ、いやだ——」

(私がお嫁に行く時なんて——)

チビ君はをかしくなつてクツクツと笑つて了つた。と同時に今迄お姉さんを取つて行く様な気がしてたゞ憎らしかつたあの方が、何となく親しみ深い様な気がして來るのを覺えるのだつた。

(綽名をつけちやほうかな、トンボ義兄さん！)

ウフフ……と又一人で笑へて了つた。

微笑日記

十一月十日

今日は日曜でした。戸をあけると物干臺からお隣の屋根瓦から全部眞白。もう霜が降りはじめたのね。寒い筈だワ。高木さんがシモヤケが出來た、と云つて盛にかいがつてゐるのを「霜やけどだなんて。まだ霜も降りないのに變テコリンねエ」なんて皆で笑つちやつたけど——だけど高木さんのシモヤケはほんとに霜が降りない中からヨ。さては霜の降りる前ブレかな。小指がタラの子みたいに赤くブク／＼ふくれてゐる。

「高木さん、貴女お辨當のお茶要らなくていゝわネ」だつて。悪口屋の戸田さんがいつかそ云つ

たらば、少うしお人好しの高木さんたら一寸も氣がつかないで「どしてさ」だつて。

「だつてあなたの指タラの子みたいでシヨ、だからさ、ワザ／＼タラの子もつて來なくてもすむからヨ」と戸田さん。

「アラひどいわ、指なんか食べちやつたら又もう生えやしないワ」つて高木さんたらマジメな顔してたつけ。高木さんてほんとにいゝ子だナ。大好き。

今朝みたいに霜がひどく降ると、あのタラの子がもつとふくれちやふんぢやないかしら、可哀相だワ。お當番の時お雑巾をしぼる時とても痛さうなんだもの。そいでもつて人指し指と親指の先つぽの方でチヨイとお雑巾をブラ下げて、お机の上をなでて歩いてる恰好つたら……アラ、何だか私も足の薬指のへんがヘンだワ——とモゾ／＼やつてゐたら、

「初ちやアーン、早く起きて降りといでエ」とお母さんの聲。ア、さうだ、今朝は私の大好物のアレをこさへてもらふ筈だつたんだワ。ウワイ、と大急ぎでお清團をたゝんで押入れへ押しこむ、お掃除をして階下へ降りて行く。

お兄さんが首へタオルをまいて齒ブラシを使つて居た。相變らず右へ左へと齒ブラシを動かして居る。齒ブラシを左右に動かすのは齒の質を痛めるだけで、齒のゴミを取る用には立たない、上下へと動かさなきや駄目です、つて、私、學校で齒齒検査の時齒醫者さんにきいたから、お兄さんにも教へてあげたのに。忘れん坊ね。

「お兄さん、先に洗はして——」お兄さんの齒をみがく間はとても長いんだもの。シツレイして其の間にいつも私お先へ洗つて了ふ。普段の日はお兄さんよか私の方が先に洗ふから（お兄さんはお店のお掃除がすつかり済んでから顔を洗ふ）そんな事ないけど、日曜日の朝は大ていさうである。

お茶の間に行くとお母さんは手拭で頬かぶりをして煉炭火鉢をプウ／＼とふいて居た。

「吹いてあげようか」私は煉炭を吹くのはあんまり好きぢやないけど、お母さんは少し近眼だもんで、いつも吹く穴の見當を間ちがへるもんで、灰をプウ／＼吹いちやつて、そこから中眞白にしちやつて、自分は顔に灰をかぶつて「ベツペ」なんて云ふんだもの。

お兄さんが頭髮を櫛でときつけて、お膳の前へ坐るまで、私はプウ／＼吹いて居た。のぞくと煉炭の底の方がポオツト赤くなつて居る。シメ／＼、此の分では無事おこりさうだ。

朝の御飯は私の好物のアレ、即ちおいしいものお粥である。お芋を輪切りにして鹽味のお粥に入れ
たもの。大好きさ、温かくつて甘くつて鹽つばくつて。寒い時はお味噌汁よかずつとおいしい
ワ。

「ねエ、母さん、あの家はどうかね、あすこならまだ新しいし、何しろ建つて三年目位なんだ相
だよ」

「あの繪描きさんとこかい？」

お母さんとお兄さんが話をし出した。

「だつてまだ繪描きさんが居るんだロ、人が住んでるのを追んだすわけには行かないだらう？」

「ウウン、こないだ酒屋の小僧にきいたんだがね、賣るんだつてさ」

「へエ、だけどあんな大きな、アトレーとか何とかあつちや、普通の人には不向きぢやないのか
？」お母さんたらアトリエのことをアトレーだなんて云つてる。

アトリエのある家、つて一體何なのかしらと一寸考へて見た。酒屋の小僧さんにきいたとすれ
ばこの近所にちがひない。アトリエのある家！須賀さんの事かしら？ 須賀さんの家ならチビ

君の家の前の道をつき當つて左へ折れた角の家で、繪描きさんだとか云ふ事である。なる程大き
なアトリエがある。

「それどしたの？ アトリエのある家、誰が買ふの？」

「市ヶ谷のお家です」

アラ、修三さまのところで家をお買ひになるの、マア！一寸も知らなかつた。お兄さんは前から
頼まれて居たらしい。道理で一週間ばかり前も「麻布なんだけどね、どうも入口が便利がわるく
つて。あすこぢや自動車が入らないな」なんてお母さんと云つてたつて。はじめは家がお引越し
するのかと思つてゐたけど、自動車が入らないなんて云つたから、さうぢやないだらうとは思つ
た。だつて家ぢや自動車なんて要るわけないもの。

「アトリエは又どうにか一寸造作をし直せばいゝよ。それがあつてお家の割には格安な
んだヨ、丁度御註文通り七間か八間なんだし——」

「あすこなら立派なもんだね、高臺だし、日當りはいゝし、風通しもいゝだらうし……ぢや一遍
市ヶ谷へお話に行つて來たらどう？」

お午からお兄さんは行く事になつた。午前中は問屋さんへ行つて毛糸とボタンを仕入れて來なきやならないもんで。

毛糸と云へば、須賀さんのお嬢さんが今日の夕方買ひにいらつしやる筈。昨日の夕方、「褐色のスコッチ毛糸ある？」つていらつしたんだけど相憎だつたので今日の夕方、「と云ふお約束をした。あのお嬢さんは自分の家が賣物に出てること知つてゐるのかしら？もし知らないでゐて急にそれがわかつたら随分悲しいだらうと思ふわ。私だつたら泣いちゃふな。だけでもしかしたら、あの家を賣つてもつと他にいゝ家を建ててゐるのかも知れないし……バカだな、私つたら。よくわかりもしないのにへんな同情なんかして。をかしいの。ア、もう十一時半だ、お晝飯たべたらお兄さんと修三様のところへ行く筈だから、今日の日記はこゝで一吋休けいッつと。

二

十一月十日

昨日はたうとう日記のつゞきが書けなかつた。だつて夜の十時半頃まで修三さまと利イ坊さま

が遊んでいらしたので。

お晝すぎお兄さんと修三さまのお家へ行つた。お兄さんたら盛に氣取つて、新しい草色のアンダーシャツを着たり、靴をピカピカに光らしたりした。あの草色のアンダー、大嫌ひさ。草餅みたいな色してて。あれ着るとお兄さんの黒い顔がマス／＼黒く茶色に見えるんだもの。

「そんなインチキ色のアンダーやめなさいヨ」と云つてやつた。だつてイカにも安物みたいで（ほんとに安物なのヨ、一圓三十銭つて正札が落こつてゐたのを私見たんだもの）あんなインチキなキタない色のアンダー着て行くと、修三様にシユミの程をうたがはれちやひ相で。修三様つたらとてもお洒落なんだもの。アンダーだつてそりやお父さまのお古にはちがひないけど、お父様がロンドンで買つていらつした青磁色のとても上等ハクライのを着ていらつしやるんだもの。「何でさ、この色は今年のはやりだぞ。リュウコーのトップだ。スゲーんだぞ」

お兄さんたらいゝ氣持なの。困つちやつた。だけど人が着てるものムリに脱がすわけにも行かないし……仕様がなから、出かけた。外套を着て了へばわかんないけど、修三さまのそこへ行けば脱ぐでせう。さうすると背廣の上衣からお胸マル見えなんだもの。それにお兄さんと來たら

いつもお店に居る時は上衣なんか着てないもんだから、つい癖で上衣のボタンをはめるのいつも忘れるんだから。

修三さまのところへ行くと、いきなり利イ坊さまがとんで来て「あのね、初ちゃん、お家引越しするのヨ、もうぢき」と云つた。私もお兄さんもビツクラしちつた。だつて折角こつちでいゝ様なお家を探して御注進に來たのに、さてはもう何かいゝお家がきまつちやつたらしい。

「ど、どこですか？」お兄さんもさすがあはてたわね。

「代田橋の方なのヨ」利イ坊様は嬉しそうにピョン／＼はねていらつしやる。

「随分ひつこむぢやありませんか？」お兄さんは必死になつてそのお家にモンクをつけはじめた。

「だつてとてもいゝお家なのヨ、昨日見に行つたわ、お父さまとお兄さまと三人で——」

ウヘエ、と云ふお兄さんの顔。オヤ／＼と私もガツカリしちやつた。

修三さまとお父さまはお庭で萬年青の植ゑかへをしていらした。二人ともスエターにズボンに頬かぶり、と云ふイサマシイお姿。ところがオドロイタ事にはコマツタ事にはお二人とも、リュウコーのトップの色を着てらつしやつた。草色なのヨ、お兄さんやイカにとソツと横目で見ると

外套を脱いで例によつて上衣のボタンをはめないで、下のチョッキ代りの草色のアンダーシャツをマル出しにして居た。けれど私はもうハラ／＼しなかつた。あゝやつて着てゐるととても一圓三十錢には見えないナと思つて安心してゐた。修三さまたちのと大してちがはない様に見えたのだもの。ところが色々御話の後で、修三さまの御部屋に上つてお兄さんが煙草をのんでゐる時、修三さまが「オイ、君もそのアンダー着てゐるな」とおつしやつた。傍で利イ坊さまと國取りごつこをしてゐた私はヒヤツとした。お兄さんはニコ／＼してトクイ相な顔して「エヘヘ」だつて。修三さまはお兄さんのアンダーの胸のところをひつばつて見て「ホオ、こりや大分上等だなア」とおつしやつた。修三さまつてヒニク屋ね、私少し口惜しくなつた。お兄さんたらなほも嬉しそうに「何に、安物ですよ」とすましてゐる。「イヤ、僕のよりかは大分上等らしいぞ。僕のはね、君、オドロクナカレ、神樂坂の夜店にて金一圓と十錢ナリぢや——」修三さまつたら！眼をまんまるくして威ばつてゐるの。私全くヒヤツとしたりスツツしたり、アツクなつたり冷くなつたりしちやつた。お兄さんたら喜びイサんで「僕のは赤札で一圓三十錢です」なんて白じようしてゐるの。——でもマア、修三さまがさうだつたんで全く私ホツとしたワ。家へ歸つて寝る

時にその事お母さんにそいつたら「何も一圓三十銭だからつて恥しがることはないぢやないか。修三さまみたいないゝ家のお坊ちゃんできへ、夜店へなんかいらつしやるんだもの……へんな事を恥しがる子だネ」つて笑はれちやつた——。

「もうお家がお定まりになりました相で——」お兄さんは縁側から手を拭きく上つていらしたお父様におききました。

「ウン、イヤなにネ、昨日一寸見て来たところがあつただけだね」

そのお口振りでは、まだハツキリきまつた様なマンバイでもないらしいので、お兄さんも私もホツとした。

「一寸いゝ家なんだヨ。さう、間数はこゝと大して變らない、七間だつけナ」

「お離れがついてゐてハツよ」利イ坊さまがチョコンとお父さまの側に坐つてさうおつしやつた。

「さうく。あんまり離れてゐるのでつい忘れた、アハハ……」

「全くあの離れはハナレにハナレてるなア、天氣の悪い日などは母家と交通途絶だネ、第一コワいな、あんなところにポツンと一間——」修三さまもお庭から上つていらしてさうおつしやつた。

「そんなにはなれてゐるんですか、そりや一寸困りますネ」お兄さんは夢中になつてモンクをつけ出した。

「お國からお祖父様やお母祖様がいらした時に、使ふとこにしとけばいいぢやないの。さもなきやあふだんは御父様の御本をしまつとけば……」利イ坊さまは餘程そのお家が氣に入つたと見え、さかんに鼻氣にしてゐる。

「リユウマチのお祖母様にはとてもダメだヨ」と修三さま。

「御本もいゝけど一々あすこまで取りに行くんぢや大變だな、パパもリユウマチになつちやふ——」お父様もさうおつしやつた。

「だけど中々いゝ家なんだヨ、木口はいゝしね、まだ建つてから二三年位なんだ相だ。前庭があるし、洋館と日本間と半分半分だね、庭に池もあるし、少し高臺でね——」

「で、もう大抵お定めになりますんで……」お兄さんはハラハラしてゐた。

「ウン、四五日前にもネ、荻窪の方を一軒知らせてくれた人があつて見に行つたが、こいつは少し廣すぎてね、二十疊敷きの應接間なんてあつてね、とても手に負へないし——」

「しかし代田と申しますと随分ひつこむ様で」お兄さんは必死だった。

「さあそれが、その役に立たぬ離れと共にモンダイなんですね。小田急と帝都電鐵の驛から、どつちから行つても七八丁あるんだよ。僕も修三も利恵子も三人毎日出るからね、天氣の悪い日なんか困ると思ふんだ」

「僕なんて寢坊が出来ないヨ、今までの三倍時間がかゝるんだロ、學校へまで——」修三さまも一寸こぼし調子である。

「そりやあ一寸困りものですか、何しろ毎日のことですからね——」

「中々これと思ふ手頃のものはないネ。何ね、前から探してゐた事は探してゐたんだが、今度急にお祖父さんたちが東京で住みたがつてね、この家も相當古く住んで色々都合もわるいし——」

「僕の部屋雨もりがひどいんだ、こないだなんて壁にはつといたカントの寫眞がシミだらけさ」

修三さまはやりきれねえや、と云ふ様なお顔。カントつてのはあのおデコのヘンテコレンな顔の西洋人のことね、世界一のテツガク者だ相だ。いつだったか大掃除の時に、あれが見えなくなつたと云つて大さはぎだった。私がゴミためから拾つて來たら「ウワー、もつたいなや〜、ブル

ブル、カント大明神！ アラ心なの乙女よなア」なんて云つて私の頭をコツンとゲンコで打つて、何だか知らないけど、キタナイみたいなた茶色の寫眞を大事相に押しいたゞいて、三拜九拜していらしたつけ。あれがトウ〜シミだらけになつちやつたのね、お氣の毒さま——。

「何かないかね、君の心あたりに——」

お父様のお言葉にお兄さんは待つてました、とばかりに膝をのり出した。

「フン、フン、そりや中々いゝ家だね、それでその程度で手放すつてのは餘程いそいでるんだな」お父様はお兄さんからそのお家の説明をおききになつた。

「左様ですね、マア、アトリエがあつて一寸造作に手がかかると急いでゐられるのとでね——」

「須賀文一朗なんてあんまりきかん名だね、ヘツポコ畫家かな」お父様はお口がわるい。

「二科とか三科とか云ふところに昔チヨイチヨイ出してゐたとかで——」とお兄さん。

「三科はケツ作だナ。きつと三科位の畫をかくんぢやないのかい」修三さまも負けずにお口がわるい。

「私 もよくは知りませんが、とてもお酒を召上る方で、それに先代さんの財産を相場かな

んかでスつた相で、あの家を建てたのがせい一杯位だつた相で——此の頃はほとんど無収入だとか、ハハハ、まあ出入の商人の云ふ事ですから、しかとはわかりませんが——」

お兄さんは雄辯になつて来て、お茶をガブリとのんでは又喋り、喋つては又お茶をのんで居た。その家も中々よささうだから、ぢや二三日中に拜見に行くから、そつちへさう頼んどいてくれないか、とお父様のお言葉。お兄さんも私も御注進に來た甲斐があつてとても嬉しかつた。

歸り、チヨイとその家の外の工合でも拜見しがてら散歩に行かう、と修三さまもいらした。

「オイ、行かないか？ おデシヤさん！」利イ坊さまはさう云はれてイヤな顔をなすつた。

大たいに於て利イ坊さまは代田のお家の方が氣に入つてゐるので、私たちの御注進には少し御機嫌なゝめらしかつた。けれども自分の家にしようと思つて色んなお家を見に行くのは、マシザラ面白くない事もないと見えて、行きたい様な行きたくない様な顔をしてついでいらした。

そして須賀さんの家をグルツとまはつて来て、歸りに家へお寄りになつた。お母さんはとても大喜びで特製のムシ壽司をこさへてあげた。修三さまは四杯もお代りをなすつた。

「相變らずよくあがりますね」とお母さんが云ふと、

「左様、男子二十五歳まではグンぐん成長するんぢや、ハイお茶漬けをもう一杯！」ですつて。

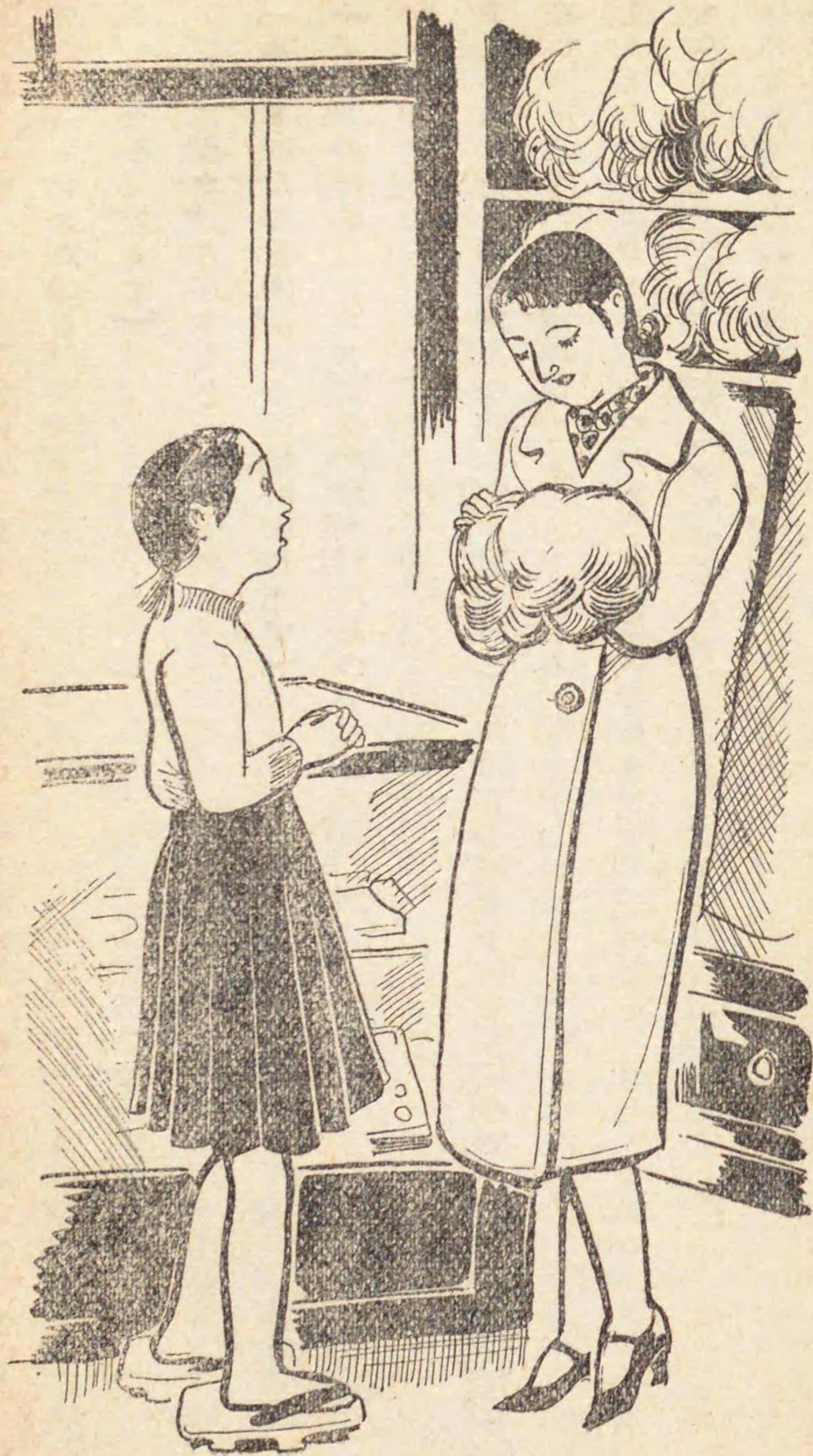
三

十一月二十×日——

今日、祭日だつたので、朝物干で日向ぼつこをしてゐるとお店で「ごめん下さい」と云ふ聲。

お兄さんが居るだらうと思つてすましてゐたら二度も三度も「ごめん下さい、ごめん下さい」と云ふ聲。お店をからつぽにして仕様がなのお兄さん。降りて行くとガラスの陳列箱の向方に淡茶色の外套を着た須賀さんのお嬢さんが立つてゐた。(アラ!)と私思はずつぶやいちやつた。今日、修三さまとお父さまと利イ坊さまが須賀さんの家を見に行く、と云ふ事になつてゐるのだもの。一昨日お兄さんがその事をきゝに行くと、須賀さんの御返事が今日、と云ふのだつた。お嬢さんは知つてるのかしら？ それとも今日と云ふ御約束がどうかして駄目になつてそれを言ひにいらしたのかしら……?」

「いらつしやいまし」私は丁寧な御辭儀をした。下駄が中々つかかけられなくて餘計恥しかつ



た。

「あのね、こないだの日曜日、いたゞきに來るつてお約束のスコッチね——」

「ア、まだでしたの？」

「エ、あれ來たこと？」

左手の毛絲棚を見上げ乍らお嬢さんはきいた。

「エ、澤山入りました、どうぞ、此方へ——」

お嬢さんはのび上る様にして棚の毛絲を見た。

「あの上から二番目の茶色のね、あれ、一寸見して下さんない？」

私はそれを取らうとしたけどカナシかな、上から二段目の棚は下から四段目、とても手がと

ゞきやあしない。いくらの上つてもまだあと一尺位ある。足つぎを探したけど相憎とどこへや

つたのか見つからない。お嬢さんの前で棚の棧につかまつてよじのぼるのもシュータイだし、お

嬢さんはあの毛絲が見たいのだし……困つて了つた。

「届かないの？ 私がとつてもいゝ？」私より四五寸背の高いお嬢さんは、さう云つてヒヨイと毛

糸にとびついた。そして茶色のスコッチの一ポンド束を引きぬいた。私は眞赤になつちやつた。

「コレ、一オンスおいくら？」

「あの、三十三銭です」

「アラ、さうオ、さうすると一ポンドだと？」

「一ポンドになると四圓六十二銭になります」

一ポンドの時は二オンスぶりだけ割引になつてゐる。

「四圓六十二銭？」

お嬢さんは擱んでゐた左手のお金を數へはじめた。五十銭や十銭や五銭やで三圓四五十銭位しかなかつた。

「大人ものスエターだと一ポンドでできないでシヨ？」

「マア、御身大きい方でしたらタツプリー一ポンドから一ポンド二三オンスですわ」

いつもお兄さんの言つてる通り眞似して答へた。

「袖なしの、あのチョッキジャケツなら十オンス位でいゝでシヨ？」

「エ、ジューブンだと思ひます」

「さう、ぢや十オンス頂戴」

お嬢さんはアツサリさう云ふと三圓と三十三銭をガラス棚の上においた。

一ポンドは十六オンスだ。一ポンドで二オンスぶりおまけするなら、十オンスだつたら一オンスと一寸おまけしなくちやいけないわけである。だけどこのおまけは一ポンドの時に限る事になつてゐた筈である。勝手におまけしてはお兄さんに後で怒られるかも知れない。おまけしてあげたいのをガマンした。それでも三銭だけはおまけしてあげた。

大きな包みをかゝへてお嬢さんはピョンピョンと楽し相に歩いて行つた。

きつとお父さんのスエターをあんであげるつもりにちがひない。そいだのに毛糸の値段の都合で、袖なしのチョッキジャケツに早變りしちやつたなんて。心の中では随分ガツカリしたにちがひない。お父さんも袖があるのとないのでは、だいぶ温かさにちがひがあるだらう。

一足ちがひでお兄さんが歸つて來た。一町ばかり先のタバコ屋さんにバットを買ひに行つてたのだ相だ。毛糸を賣つた事を云ふと、

「何だ十オンス以上お買上げの時は一オンス振り位おまけするんだヨ。全部そのワリぢやないけどネ」とお兄さんが云つた。私は思はずブル／＼とふるへる程口惜しかつた。何故思ひきつて十三銭負けてあげなかつたのか、と思つて。

午後の二時頃、修三さまがお父さまと利イ坊さまを連れていらした。利イ坊さまは相變らず（私本當は代田の家の方が氣に入つてるのヨ）と云ふ様な、ありがたくないみたいな顔をしてゐた。眞赤な外套に白いウサギの襟のついた可愛い恰好をして、繪からぬけ出したみたいなのに、どうしていつもあんなにシヤクにさはつたみたいなの顔をしてゐるのだらう！

「初ベエ、君も來ないか？」

案内にお兄さんだけがついて行かうとすると、修三さまがシヨンボリ後に残つた私を誘つて下さつた。

「でも向方が空家ならいゝですが、まだ住んでいらつしやるんですから、さうゾロ／＼行くのも失禮ですから——」

お兄さんがさう云ふと修三さまが「あ、さうか」と頭をかき乍らへロツと舌をお出しになつた。

「ゾロ／＼と云ひやあこの坊主なんかもゾロゾロ組さ、そんなら利惠子もおいで行くか？」お父様がさうおつしやると、利イ坊さまの口唇がへの字になつた。そして見る／＼中に眼が赤くなつて、涙がにじみ出て來た。アラアラ、泣いちやふワ、と氣が氣ぢやなかつた。代田の方のお家が氣に入つて、此方のお家なんか見たくもない様な顔をしてらした癖に。ヘンなものネ。

「さ、行かう／＼、皆で威勢よく見せてもらひに行かう、三人行くも五人行くもどうせ同じだ」お父様が元氣よくさうおつしやつたので、私も御供について出かけた。實は私もつても行きたいみたいに行きたくないみたいだつた。と云ふのは、あのお嬢さんのお家を見ると云ふ事が、何だかとても秘密のお城でものぞきに行く様で、たまらなく行きたくつたし、又あのお嬢さんは自分の家が賣られると云ふ事を知つてゐるか、知つてゐたとしても、ゾロ／＼と丸で見物しに來たみたいに来られたら、さぞイヤなカナしい氣持になるだらうと思つて、行きたくなかつたのでもあつた。

砂利を敷いた道を二丁計り行つて、切り通しをすぎると道が左右へ二つに分れてゐる、そこを左へ曲るとすぐ角の家が須賀さんのお家である。青い屋根瓦をふいた大きなアトリエの屋根が見え

た。お二階のヴェランダにはメリンスのお布団が干してあつた、あれはきつとあのお嬢さんの
ちがひないわ——今にもあの窓からお嬢さんが首を出してだまつてニラみつけ相な気がした。
五十位の婆やさんがお取次ぎに出て来た。お兄さんが「一昨日御約束いたしました、あの、お
家を拜見に参つたんですが——」と云ふとすぐ引込んだ。かと思ふとパタ／＼と軽い足音がし
て、あのお嬢さんがニコ／＼笑ひ乍ら出てらした。私は小つちやくくなつて（だつて何だか悪くて
……）修三さまたちの後の方にかくれる様にちぢこまつた。

「さあ、どうぞ、パパが一寸風邪氣で今朝程おそく起きましたので、支度が出来ます迄私が御案
内いたします、さ、どうぞ——」

お嬢さんはハキ／＼とさう云つて、スリツパを並べて下さつた。スリパは古かつた、そして少
しやぶけたのもあつたけれど、赤い刺繍が爪の先んとこについてゐて、買った時はだいぶ高かつ
ただらうと思はれた。三足しかなかつた。お嬢さんは顔を一寸赤くしたけどすぐ「あの失禮です
けどこれを——」と云つて自分のはいてゐるのを私の前に出して下さつた。お廊下は茶色でキツ
が少しいつてゐたけれど、ツル／＼と迂り相でハダシで歩いててもキレイ相だつた。

「ナツちん、ナツちん、直樹さアーン」

さうお嬢さんが呼ぶと廊下の突當りからドアがあいて十位の男の子が首を出した。

「ナツちん、すまないけどナツちんのスリツパ一寸貸して、このお嬢ちやまに貸してさしあげる
んですからね」

ナツちんさんは一寸つまんなさうなフンガイしたみたいな顔をしたが、澁々スリツパを自分の
お部屋の前で脱ぐと、二つを片手でブラ下げてハダシで歩いて来た。

「いゝんですヨとお父様はおことほりになつたけど、お嬢さんは「ほんとにすみませんけれど
——」とあやまり乍ら利イ坊さまの前にナツちんさんのスリツパを揃へた。空色の、これはまだ
新しいキレイなスリツパだつた。私は（こんな大勢来るんぢやなかつた）と少うしお氣の毒に
なつた。

お玄關脇の洋間の應接間は長細くて真中に一寸しきりがついてゐて「こゝなら二組のお客が應
待できるネ」とお父様が喜ばしさうにおつしやつた。お父様は會社の重役さまだし、又御本をお
書きになるので、會社の方のお客さまや本屋の人なんか、よくかち合ふ事があるので、さうお

思ひになつたのらしい。眞正面に大理石のマントルピースがついてゐた。(私はアラ立派なストーブね、と思つてゐたが、修三さまが「ヤア、このマントルピースは豪勢だナ」とおつしやつたので、あゝ云ふのはストーブと云ふのではなくて、マントルピースと云ふんだナとわかつたの) 食堂には長いテーブルと椅子が六脚並んでゐた。カーテンが下つてゐたが、冬だと云ふのに夏のリースのカーテンだつた。

日本間の方は立派なお床の間がついてゐて、その脇はちがひ棚と云つて下の方は戸棚になつてゐた。ちがひ棚の上にはフランス人形がかざつてあつた。スカートのとこにシミがついてゐた。

「アラ、このお人形にシミがついてゐるわ」利イ坊さまが目ざとく見つけて大きな聲で云つた。

「ドレ〜、アレ、まさか此處も雨もりするんぢやないだらうな」

雨もりには大閉口の修三さまは大分氣にかゝると見える。

「ホホ、まさか。それネ、私が作つてゐる時にナツちんがアメをくつつけたんですのヨ。知らないでゐたもんで、あとで拭いたんですけどシミになつちやつたんですわ」

お嬢さんはをかし相に笑つた。

お二階はヴェランダのついた西洋間、日本間の上は日本間のお座敷——。

「中々凝つておこしらへになつたんでせうね、立派なもんです——」
お父様は感心の態だつた。

お部屋はアトリエを入れて七間だつた。七間か八間と云ふのはお望みの間敷である。一等おしまひにアトリエへ案内してゐた。六疊の間を四つあはせた位の廣さで、そんなに大きいと云ふ程ではなかつたが、天井が普通より高いのでとても廣々としてゐた。書きかけの大きな繪が隅つこに一杯たてかけてあつた。

「こゝを割つて勉強部屋、即ち書き物をなさるお部屋、そして後の方を書籍庫にして、こつちの一角を僕が頂戴する、と云ふ風に造作したらとてもいゝぢやありませんか。そしたら向方の方の日本間がガラ空きになるから、お祖父様たちに提供できるでせう」

修三様はアトリエの大きなガラス窓から、下の方に擴がつてゐる景色を見乍ら、色々と算段を
していらした。フンフンとお父さまはうなづいていらつしやつた。

「ぢや私のお勉強部屋は？」利イ坊さまは修三さまに、いつもからかはれたり、いじめられた

り、キュウキュウ云はされたりするくせに、修三さまの傍をはなれたくないと思ひ、今修三さまがアトリエを改築してお父様と仲よしにならうとしていらつしやるのをきいて、天下の一大事とばかり目を丸くしてつめよつた。

「君はホラ食堂のおとなりの六疊の日本間に居りやあいゝぢやないか。夜もお母さんと二人で寝ろよ、君と寝るのはコリくゞだよ、夜中に大きな聲してワメいたりなんかするんだもの、こつちは睡眠不足になつちまはあ」

修三さまはどこでも誰の前でも容しやはない。利イ坊さまはさう云はれると、チラツとお嬢さんの方を見て眞赤になつて了つた。

すつかりお家の中を拜見して元のお玄關前のお廊下へ出て来ると、お嬢さんは食堂の中へ私たちを呼びこんで「どうぞ父の参ります間御茶でもお一つ——」とおつしやつた。

何時の間にか食堂のテーブルの上にはお紅茶とお菓子がつてゐた。私たちは椅子に腰かけてお茶をいたゞいた。

利イ坊さまが急に御不浄に行きたい、と云ひ出した。私も丁度さうだつたので一緒に、先刻「こ

こが御便所でございます」と教へていたゞいた所へ行つた。

二人がお廊下をかへつて来ると、食堂の隣のお茶の間から、ナツちんさんとお嬢さんの聲がきこえた。私はハツとして了つた。だつて——、

「お姉さん、ベビィシウクリーム、頂戴よ」

「もうないのヨ」

「ウソだアイ、先刻三十錢も婆やに買ひに行かしただないかア？」

「だつて皆お客さまにお出ししたのよ」

「残つてる筈だアイ」

「ネ、いゝこと、お客さま五人でしょ、そして三つづつおつけしたの、そしたらいくつになるの、十五でせう、ネ、もう皆ないでしょ——」

「パパのものないのかア？」

「エエ。だつて、お客さまあんなに澤山いらつしやると思はなかつたんですものオ」

私はとてもツライ様な気がした。利イ坊さまはお席に歸ると「先刻の男の子ね、とても食ひ辛

棒よ、私たちに出したシウクリームたべたいつて、おダダをこねてんの、ウッフ……」と笑つてゐたけど——。

須賀さんが出ていらした。大きな身体の、よく肥つた、髪の毛をモシヤ／＼にした人の好さうな方だつた。此の方なら私前にもよく知つてゐた。夏の頃はよく大きなシエフアードとか云ふ犬を連れて散歩してらしたから。胸のあいた運動シャツを着て、いつも犬を口笛で呼び乍らお店の前を通つていらした方だ。目がお嬢さん（五百子さん、と須賀さんがお呼びになつてゐた）とそつくりで眞圓でハツキリとしたキレイな眼だつた——。

「イヤ、フランスに行つたりしてゐた、頃は中々私も勢ひさかんでしたがな——」須賀さんはワハハと笑つた。修三さまのお父様は熱心に、

「何時頃でした？」とおききになつた。

「左様、第一回目は千九百二十と、エ、何年だつてな」

「千九百二十年ヨ」五百子さんがお紅茶をつぎ足し乍らさうおつしやつた。

「左様々々、丁度その年の暮の十八日でしたが、これが生れたんでした、パリでネ」

五百子さんはパパさんの顔を見てクスリと笑つた。

「それからこれが六つの年に家内と一緒に一遍東京へ戻つて、次はあの男の子が生れた翌年一人で参りましたヨ、その時は貴方フランスも南部の方からアルサスの方ズツトまはりましてね、ドイツ、イタリイにも二三ヶ月づつ滞在してゐました」

「千九百二十八年頃ですか？」

「左様々々」須賀さんは大きく首をふつた。

「僕も丁度その頃第二回目の旅でフランス、ドイツを廻つて居ましたがネ」

「オヤ左様ですか、もつとも貴方の方は我々繪描きの様にズル／＼した旅はなさつて居られなかつたでせうが、タマにはどこかの宿屋でとまりあはせて居つたかも知れませんな、アハハ……」

「さう云へば一度、貴方みたいに肥つた日本人が、宿つてゐた事がありましたヨ」

「イヤ、さう云へば私も貴方のその八の字ヒゲにおぼえがある」

須賀さんと修三さまのお父様は、大變イキ投合とかをして、長い間お話をしてゐらした。

私は修三さまと利イ坊さまがお庭を見てゐる間、ソオツと表門の方へ行つて見た。お玄關から

御門に通じて敷いたコンクリートの道に、ナツちんさんが白墨で時計の恰好をかいて1、2、3と、數字を書きこんでゐた。

とても一人でシヨンポリと淋しさうだつた。黒と茶のゴバン縞の短いパンツのお尻んところが破けてゐた。

「ナツちんさんとここにホラ大きな犬居たの、あれどうしたの？」

「シルヴァーかい？」一寸の間ナツちんさんは眼をバチクリさしたけれど、思ひきつた様に云つた。

「犬屋に賣つちやつたんだい。ステ値で二百五十圓だい」わかりもしないのに、ステ値でだつて。可哀相にネ。

今日は一晩中、修三さまたちがお歸りになつてから後、何だか氣がおちつかなくなつて。スリツパが足りないといつて、自分のはいてゐるスリツパを脱いで、私の前へ揃へて下さつた五百子さんの事や、コンクリートの道でシヨンポリしやがんで、犬の事をきいたら「賣つちやつたんだい」とさもあきらめたみたいに、そいつたナツちんさんの聲！人が好ささうで何のくつたくも

ないみたいな須賀さんのニコニコ顔なんかが、チラ／＼して仕様がなかつた。

二階の洋間のヴェランダの椅子の上に、今朝賣つたスコツチ毛絲が、大きくマリの様に巻いて編みかけてあつたのも眼に残つてゐる。

四

十二月×日――

今日學校の歸りに下駄箱のところで高木さんに「今日貴女の家の方へ行くから一緒に歸りませうネ」と云ふと高木さんはとても喜んだ。

そして例によつて「どこへ行くの？ 何しに行くの？」とききこむのだつた。高木さんのモレツなきゝこみには組中の人がメイワクしてゐる。高木さんと來たらジツに何でもよくききたがる。だもんで色んなアダナの他に又此の頃は「イツ、ドコで、ダレがナニをした女史」と云ふ長いアダナがついて了つた。

「大工さんとこへ行くのヨ」と云ふと「あゝ又あの一寸法師の大工さんとこオ？」とよく知つて

ゐた。此の前も一遍行つた事があるからだつた。伍兵衛さんは修三さまのお家のお出入りの大工さんである。此の前私の家がお店をはじめの時も、伍兵衛に頼むといふよと云つて下さつたのでスツカリしてもらつた。とてもチビで小學校の四年生位の背丈しかない。その癖子供は大きくつて、一番上の花江さんなんて子はお父さんの伍兵衛さんより二寸位高い。その下の房ちゃんといふ女の子だつて、小學校の三年生だけれど伍兵衛さん位はある。

「又お店どつか直すの？」

「ウウン、あのネ、修三さまのこの御用で呼びに行くの」

愈々修三さまの所では家を定めた。須賀さんのお家である。

こないだの日から四五日たつて、チャンと買ひ取る事に約束が出来たのだ相である。そしてアトエんとこを改築するために、大工さんを入れる事になつた。須賀さんのお家でも引越す家が見つかり次第引越す事になつて、今お荷物をまとめてゐるとの事である。

伍兵衛さんの所の番地はやゝつこしくつて誰も覚えてゐない。所は知つてゐても番地がハツキリしないで、此の前の時もさうだつたけどエイ面倒くさい、行つちまへ、と云ふので又私がお使

ひに行く事になつたのである。

「あのブリキ屋の隣でせう？」此の前も一緒に行つたので高木さんはよく覚えて居た。

「さうよ、あすこの家の一等上の女の子、新宿の通りで花を賣つてゐるんだつて。此の頃、私も見たわ。此の間お酉さまの時お父さんと新宿へ行つたらば、紀州屋つて本屋の側でほんとに賣つてたワ」

花江さんにちがひない。花江さんが花賣り娘になつたなんて。どうしたのかしら……？

バスの通る通りを横切つて、露路を二つ曲ると伍兵衛さんの家の前へ出た。

「ぢやさいなら、歸りに家へ寄る？」

「ウウン、今日は早く歸んなきやア——」

「さう、ぢやさいなら」高木さんは自分の家の方へドンドン行つて了つた。

「今日は——」とガラス戸をあけて入ると、いきなり上り口のところの花江さんが居た。どこかへ出かける様な様子だつた。

「お父さんいらつしやる？」

「あの一寸お晝すぎから仕事に出たんですけど——」

此の前途つてからも半年以上もたつので、花江さんは又一寸も脊が高くなつて、色が白くてとてもキレイになつてゐる。それに洋服なんか着てゐるからとても見ちがへる程だ。

伍兵衛さんに市ヶ谷の修三様のところへ行つてくれる様にと頼んで歸らうとすると、後から花江さんがトコ／＼ついて來た。

「初子さん、省線？ そしたら一緒に新宿まで行きませう」

私は花江さんの手を見た。けれど別に何も花籠らしいものも持つてゐない。

「エ、行きませう」花江さんと肩を並べてへと云つても私はチビ君だからノツポの花江さんよか三寸も小つちやいの。

花江さんは、此の頃お父さんがソコツになつて、仕事に行つてもあぶなくつて仕様がな、とか、こないだも仕事先で丸太に足をはさんで二週間仕事を休んだとか、色々話した。

私は、實は今日來たのは、修三さまとこの今度の新しいお家の造作で、割に大がかりらしい事を云つた。

「大きな仕事ならどうせ二人位若い人を連れて行くから、マアお父さん指圖だけですむけどネ、ほんとにあてにならないのヨ、あぶなくつて仕様がな、とさも弱つたなアと云ふ様に云つた。さう云へば伍兵衛さんも、もう四十五六になつてゐるらしい。

「今日はお引越しの棚吊りや雨戸なほしなんで、大した仕事ではないけど。歸りに省線のエンジンドアにはさまれたりしなきやいゝけど……ホホ……」

花江さんは笑つたけどずるぶん心配相だつた。折角伍兵衛さんをたのみに來たのに、そんな事ぢや困つちやふな、と私も歸り道少し心配しちやつた。

「さよならア」

新宿へ來ると花江さんは元氣よくプラットホームへとび降りて、キレイな齒を出して笑ひ乍ら、私の乗つた電車が動くまで見送つてゐてくれた。夜、

「ネエ、花賣り娘つて、どつかへお花をおいとくの？」とお兄さんにきいて見た。

「何で？ ヘンな事きくなア。花賣りつて、あの賑やかな通りで十錢の切り花賣る奴かい？ さあ、どうだらうな、あゝ云ふ物をこさへてゐる家へ取りに行くんぢやないかな、自分の家へなん

かあんまりもつて歸るまいよ、花がいたんじまふからナ。マ、さう思ふがネ。兄さんも花賣りをした經ケンがないからよく知らないや」兄さんはかう答へた。

ぢやきつと花江さんはあれから間屋さんへ廻つて、花を取りに行つたにちがひないわ。だけどジツに朗かだつたわネ。もし、花賣りが本當としても、あゝ云ふ風にキレイで、あゝ云ふ風に朗かだつたら、きつとよく賣れるにちがひない、と思つた。

どうぞ親孝行の花江さんのお花がよく賣れます様に！ 花江さんに負けずに親孝行するため、私は何をしたらいいのかしら？ 何もする事がないので宿題を丁寧によつて、國語と歴史の豫習をよやくやつて寝る事にした。これが私の今の一等の親孝行らしいんだもの。

五

十二月×日——

須賀さんのお家は引越した。元のお家とは正反對の方の一寸引つこんだ所である。今度はアトリエはなくて六疊と八疊のお部屋をつなげて、リノリウムを敷いて、そこを應接間やアトリエ代

りに使つていらつしやる相である。伍兵衛さんが話してくれた。私が伍兵衛さんのとこへたのみに行つた時、花江さんは、お引越しの棚吊りに行つた、と何気なくそいつただけだつたけど、あの日に須賀さんはお引越しをしたのだ相である。よくきいて見れば伍兵衛さんは十年も前から須賀さんとこへ御出入りしてゐた相で、今度修三さまのところでお買ひになつたあの須賀さんのお家も、三四年前伍兵衛さんが請負ひとかをして建てたもんだ相だつた。

「今度の家はネ、さうですナ、四間、五間、五間です。古い家でネ、敷居なんか踏むとギン／＼云ふんですからネ。あの旦那もいゝ方ですがね、お酒をやりすぎるのと一寸ばかり變人で、好かねえ仕事は一寸も引き受けない、そこへもつて来て前の旦那の残した財産でやつてゐたのを競馬でスつてネ」伍兵衛さんは須賀さんのお家を改築しだした頃、よく私の家へ歸りに寄つて話して行つた。今日も今日とて長い間話してゐた。

「株で損したんぢやないのかイ？」お兄さんがきいた。

「繪描き仲間で競馬をやつてゐたんですヨ、そしてだん／＼食ひこむもんでおしまひに株をやつたんですヨ。變人もいゝけど少し變りすぎるよ、繪描きが株をやるなんて——」

「繪描きつて商賣は一體何で食べて行くんですかね？」

お母さんが不思議相にそいつた。アラいやなお母さん、と一寸をかしかつたけど、よく考へて見たら私も、繪描きさんなんて一體何でお金がもうかるのか分らなかつたから、眞面目な顔をして伍兵衛さんの顔を見た。

「さあね。まア繪を頼まれるんでせうネ。ところがあの旦那はそれを引き受けないうですヨ。三四年前、何とかつて云ふ西洋料理屋の大廣間の壁にはる繪をたのまれたけれど、出来上つて見ると部屋が明るすぎて、旦那の思つてる様に繪がよく見えない、つて云ふんでフンガイしちまつて、それからどこが頼みに來ても書かないんだからネ。その中にもうどこからも頼みに來なくなる——此の頃はイヤがる人のところへ頼まなくても、ペコ／＼頭を下げて書かしてくれ／＼つて繪描きが多いからね——」

伍兵衛さんは、須賀さんをナゲいたり、須賀さんのために口惜しがつたりしてゐた。

「お嬢さんたちが可哀相ですよ。あのお嬢さんは氣がシツカリしてるので泣き言は云はないけどもネ、こないだもお引越しの時手傳ひに行つたらさ『伍兵衛さん、なるだけ、古い板で間にあはし

しておいてネ』とかうなんですヨ。普通の十七八の女の子ならそんなところへ氣がつくもんぢやないんですからね。早くからお母さんがなくなつてゐるんでネ、あの男の子なんて殆どあのお嬢さんが育てた様なもんですよ——」

伍兵衛さんは五百子さんの事を褒めはじめた。

「全く、子供の事を考へたら親タルモノ、自チヨウすべし、だネ。イヤ、お邪魔さま」

伍兵衛さんは散々喋つてヤツと歸つた。自轉車にのつてチリン／＼と走つて行つた。

と五分経つか経たない中に、ガタリンと自轉車を投げ出すみたいにお店におく音、どうしたのかしらと思つてのぞくと伍兵衛さんだつた。肩から脚へかけて泥んこになつてゐる。向方から來たトラックをよけたはずみに電信柱にシヨ／＼突しちやつたのだ相である。

此の頃、俺が老眼になつてウツカリして失敗ばかりやるので、自轉車はあぶないから止める、つて娘に云はれたんだけど——なんて昨日言つてたばかりなのに。たうとうやつちやつた。印半纏の肘のところがすり切れて了つてゐた。何てあぶないんだらう！

人事ぢやあないわ、親タルモノ、子供のために自チヨウすべし——なんて、自分だつてセツに自

チヨウシなくちやいけないわ。花江さんがあんなに心配してるのに――。

夜おそく、もうお店をしまはうかな、と云ふ時分、五百子さんが入つていらした。

アラ、と思つてゐると、五百子さんはお兄さんに「あのこないだのスコッチの毛絲ありますかしら？」と云つていらつしやる。

「ア、ございます」

私は思はずとび出して行つた。

「アレよ、ホラ、上から二番目の段の、さう、その茶色――」

お兄さんが脊のびして毛絲を取つてくれた。

「幾オンス差しあげませう？」

「あのね、エ、と、大人もののスエターなら――」

「一ポンドから十八オンス位なもんですね」お兄さんは毛絲の輪をしごいて云つた。

「こないだ十オンスいたゞいたから、ぢやあ、あと八オンス頂戴」

さては袖をつける事になつたのね、と私はほゝゑんだ。

「それから青い色の毛絲を十オンス、子供のズボンなら十オンスで出来るわネ！」

五百子さんの目はピカ／＼光つてゐた。電氣のせゐばつかしぢやなかつた。

「この青はともいゝ色でせう。どうです？ お坊ちゃんのお作りになるおついでに、お嬢さんのスエターもお編みになつたら？」

お兄さんはさかんにすゝめた。

「私はネ、あのスカートの生地がほしいの」

五百子さんはあれこれと洋服地を選つて、濃いブドウ色の毛織の生地をスカートの分だけ買つていらした。そして威ばつて十圓出した。全部で八圓三十五錢だつたが、お兄さんは八圓チヨツキリにおまけして、五十錢銀貨を四枚おつりにあげた。

「どうもありがとう！」

五百子さんは嬉しさに大きな包みをかゝへて歸つて行つた。

この前は一遍袖なしのチヨツキにしようと思つたのに、お家を賣つてお金が入つたら、一寸でもお父さんを濫かくしてあげたい氣になつたのであらう。袖の分だけ買ひにいらしたのだ。

そしてナツちゃんさんのズボンも、自分のスカートも！ ずんぶん今夜は楽しい夢を見る事であらう！ 私も何だかうれしくなつちやつた。

六

十二月十日——

今日は雨が少し降つてゐて何となく身体がちぢかむみたいな日！

驛へ行くと大變な人、どうしたのだらう、いつもより少しく寢坊をして、學校へまでキユウキユウな時間しかないので氣が氣ぢやなかつた。プラットフォームは二重三重の人で一杯。電車の故障だと云ふ事だつた。

困つちやつたナ、とベソをかいちやつて足をバタ／＼とふみ鳴らしちやつた。焦れつたいの足の先が冷いのでほんとに泣きたくなつちやつた。

「アラ——」

一番前の列に立つてゐた女の人が後をふりむいてニッコリ笑つた。見ると須賀さんの五百子さ

んだつた。淡茶色のオーバーを着て、寒さうに両手をポケットにつつこんでゐた。

「いつも今頃學校へいらつしやるの？」

「エ、いゝえ、あの、今日少しお寢坊しちやつて。いつもはもう少し早いんですけど——」

「あらさう、私もヨ、今朝はね、ナツちゃんが學校へ出がけに轉んで又歸つて來たので、お洋服を着かへさしてゐたもんで十分ばかしおそくなつたの」

「あの、學校どちら？」 私は思ひきつてきいて見た。だつてよく映畫の看板についてゐるアメリカの兵隊さんなんかかぶつてゐるみたいなた色の帽子を横にかぶつてゐるし、外套の裾からは此の間家のお店で買つていらした濃いブドー色のスカートが出てゐるんだもの。こんなにお洒落をしてもいい女學校つてどこかしら？ と一寸不思議だつたから。

「私？ 私の學校は文化學院、去年の春、出たのヨ」

（アラ、もう卒業なすつたのね）

そいだのに毎朝どつかへ行く様な事今云つてらした。今朝はいつもよりおそい、なんて——。それから十分位経つと満員スシズメの電車がやつて來た。とても乗れない。第一、私みたいな

チビは、後の方の人から見えないので、居ないのかと思つてギユウ／＼押し寄せて来る。ウツカリしてるとつぶされ相。背の高い五百子さんはシツカリと私の肩のところをかこつて下さつたけれど五百子さんごとつぶされ相になつちやつた。思はず私、「ア痛ッ！」と泣き聲をあげて了つた。

「すいません、こゝに一人居るんですよ」

五百子さんがさう云つて下さると、周囲の人がドツと笑つた。

「のぞいてみたらチビ一人か」

どつかの大學生みたいな人がさう云つたので又皆ワツと大笑ひ。笑ひごとぢやないワ、全く。

お裁縫のつゝみはピツチャンコになるし、カバンには入らないのでお裁縫包みの中に入れていたお辨當のジャムパンがつぶれて長襦袢にくつついちゃふし(後で學校でしらべて、困つちやつた)

帽子は鼻の上までかぶさつて來ちやふし、ほんとに男の大人の人つてナサケ用シヤもないわネ。男の學校では「電車に乗る時は女や子供や年寄りを先に」とか「降りる人がすんでからの事」なんてこと、習はないのかしら……？

やつと三臺目に乗れた。乗れたのはいゝけど、どの驛も満員なので驛へ着くたんびにドツと

澤山乗つてくるもので、何時の間にか五百子さんとはぐれて了つた。気が氣ぢやなかつた。私の乗りかへる代々木の驛に行く途中で五百子さんが降りちやつたら——と。

代々木の驛でヤツサモツサで降りてあたりをみまはしたけれど、五百子さんらしい姿はなかつた。もう降りちやつたのかしら？ それともまだもつと先の方へ乗つて行くのかしら……？ 折角色々かばつていたどいたのにお禮も云はないで、と一寸残念だつたけど、その中に電車が出て行つて了つたので、あはてて乗りかへのフォームへかけて行つた。

學校へ行つたら遅刻は私も入れて六七人だつた。電車の故障だつて事がわかつたので出席簿に○はつかない。ヤレ／＼トクした。今日は當り前でもきつと乗りかへの都合で一分や二分位遅刻したにちがひないのに、電車のおかげで助かつた様なものだ。ナムサンキユウ、ヴェリマツチ！

をかした事があつた。高木さんも遅刻した。「先生、私も電車の故障です」つてすましてゐた。

「そんな筈ないでせう。故障したのは山手線だけですヨ。貴女んところは中央線ぢやありませんか？」と先生、中々よく知つていらつしやる。

「山手線の故障で一時に乗りかへの人が來たもんですから——」

「ぢや貴女、乗りかへの驛で降りたんですか。乗つて来たものワザワザ降りなくてもいいぢやありませんか！ズルはダメ〜。お寢坊ですよ。今週三度もおくれるのは貴女だけですヨ」と、マンマと先生に怒られちやつたの。高木さんたらおやすみ時間に、

「先生つて案外リコーね」ですつて。悪い人。

土曜日だったのでお當番をすましてお辨當のジャムパンを、高木さんの小倉アンパンと半分ッとして食べ、家へ歸つた。高木さんがあそびに来たのでズツと一緒だつた。

歸りには雨もやんで薄陽がさしてゐた。

「私、天気豫報きいたから傘なんかもつて来ないの」と高木さんは威ばつてゐた。

「だつて八時半頃家を出た頃はすぬ分降つてゐたわヨ、まだ」と云ふと、

「だつて私九時十分前に出たんだもの」つて、すましてゐた。ヤアイ、白状した。電車の故障だなんてウソついて。やつぱしお寢坊したのだ。仕様がなのお寢坊やだナ。へだけど私だつてアブないところ。あんまりエバレたものぢやアない」

家へ歸つて二階へ上つて、宿題の地理附圖を見て凸地圖のアジア洲を色で塗つてゐると、「初子

オ、利恵子さまア——」と云ふお母さんの聲。

二階の窓から下を見ると、ねえやさんと利イ坊さまが立つてゐた。

「ネエ、普しん場見に行かない？」

普しん場と云ふのは今度のお家である。もう二三日でスツカリ出来るとか、昨日伍兵衛さんがそいつてゐた。この頃は利イ坊さまも代田のお家はあきらめたのか、よく普しん場を見にいらつしやる。二三日前も修三さまと一緒にいらした。

ねえやさんは又夕方お迎へに来ます、と歸つたので、高木さんも連れて、三人で普しん場へ行く。

成程もう大分出来てゐた。伍兵衛さんは鉢巻をしてカンナをといでゐた。若い別の大工さんが一人は窓の戸をけづつてゐ、もう一人は大きな板を臺にもたせかけてスミで目盛をつけてゐた。

庭の隅の大きな百日紅の木の下にカンナつ屑が山の様に積まれてあつた。

「此のカンナつ屑頂戴」

利イ坊さまが伍兵衛さんにさう云ふと伍兵衛さんは首をふつて、

「ダメム、今朝の雨でしめつてゐますヨ、キレイな御洋服がよこれちまふ——」と云つた。利イ坊さまは一寸ブンとしたけど、さう云へばしめつてゐさうだし、それに今日は白いい方の外套を着てゐたので思ひ止まつて、ドンドコドンドコとお二階へ上つて行つた。

私も高木さんと一緒に後をついて行つた。

應接間と食堂は家具つきだつたけど、後のお部屋の荷物は皆もつて行つて了つたので、ガラんとしてとても広い。

「スゴい家ね」高木さんがソツとさゝやいた。お二階にパンやきの職人が五人寝て、下の六疊と四疊半にお父さんお母さん、姉弟四人寝てゐる高木さんだからビツクラするのも當り前だらう。

「こゝん家何人家族？」と又きくと、利イ坊さまがふりむいて、

「お祖父様たち入れなきや五人よ」とおつしやつた。

「フェー、たつた五人で此んな広い家へ住むのオ？ だいぶ不ケイザイねエ」

高木さんは目を眞圓にして遠慮もなく云つた。

「松平さんちなんでもつと広いワ、お母さまが鎌倉へ轉地していらして、お父さまとお兄さまと

女中と書生の五人で、こゝよかも四間も広いわヨ、お庭だつてこの倍の倍もよ」

「そんな広い家や庭、ふだんはどうしておくの？」

「どうしておくのつて？」

「使つてない所は？ あけとくの？」

「そりやさうヨ」

「ぢや、そこにおばけが住んでるわけネ」

「おばけ？」利イ坊さまは一寸眉をしかめた。

「ウン、誰も居ないところはおばけがゐるんだと思ふワ。そいで踊つたりとんだりはねたりしてゐるヨ、そして人が入るとパツと消えちやふの」

「ウソオ——」利イ坊さまは氣味のわる相な顔をした。

「今だつてさうだと思ふわ、お隣の部屋にも下の部屋にもウヨくと居ると思ふわ——」

「ウソよツ！」

「たゞ私たちが行きや見えなくなつちやふだけヨ」高木さんは眞面目な顔をしてゐた。

「止しなさいヨ、氣味がわるいから——」

「此の部屋だつてさうよ、私たちが居るから目には見えないけど——」

「ウワツ、キヤーツ」

利イ坊さまは横つとびに逃げ出した。私も、それからそんな事云つた御本人の高木さんもワアツと飛び出しちやつた。

ほんとに高木さんたらをかしい事云ふわネ。使つてない部屋の澤山ある家は、おばけをそいだけウヨ／＼飼つてるのヨ、なんて歸りに又云つた。さう云ふ勘定で行けば、高木さんとはおばけなんか一つも居ないと云ふ事になる。だつて二階も下もギツチリ満員に使つてるから——。家は二階の三疊におばけが居るわけだ。今まで三疊にお兄さんが寝て、こつちの大きい部屋にお姉さんと私が寝てゐただけど、お姉さんがお嫁に行つてからは、お兄さんは此方の部屋で寝てるから、三疊は使つてないんだもの。アラ、コワいな、何だか今夜からコワくなつちやつた——。

おばけの話してから、下のお庭に出た、何だか家の中が恐かつたので。

利イ坊さまはお庭に出て、伍兵衛さんの顔を見るとホツとした様な顔をした。

三人はブラ／＼とお家の周圍を歩いてお玄關の方へ来た。さうするとそこにナツちんさんが居た。汽車を三臺並べてコンクリートの道を走らせてゐたのだ。もう所々はげてゐるけど中々立派な汽車の玩具だつた。

「ナツちんさん、此のお家の方が好き？」

私がさう云ふと、ナツちんさんはだまつて笑ひ乍らなほも汽車を走らしてゐた。カラカラカラと引つぱつて行く中に、八ツ手を植ゑてあるとこの石にぶつかつて、ガチャンと汽車がひつくりかへつた。

「まあ、カンナつ屑！」

利イ坊さまの怒つた様な聲に、成程氣がついて見ると汽罐車の箱に一杯つまつて、今ひつくりかへつたのでこぼれたのは、先刻利イ坊さまが欲しがつて伍兵衛さんに、しめつてゐるからダメ、と云はれたカンナつ屑だつた。

「それ、何處から取つて來たの？」利イ坊さまの聲は少しケンノンなひゞきをもつて來た。口惜しくてたまらないと云ふ様子である。



「取つて来たんぢやない、伍兵衛にもらつたんだい」
「ンマア！」

利イ坊さまはナツちんさんをニラみつけて居たが、急に口惜しさうに、

「こゝ、あんたん家ぢやないぢやないのツ！」とどなつた。眞赤な顔をして――。

「僕の家だつたんだい！」

ナツちんさんも口惜しさうな顔した。

「そいだつて家のお父さまがお金出して買ったんだから私のものよ」

「だつて、だつてエ、まだ引越して来ないから、遊んでたつていゝんだい」

「人ん家のカンナつ屑なんか取つて、ドロボーぢやないの」

高木さんも私も顔を見合せた。少し利イ坊さまがシヤクにさはつた。

「ドロボーつて云つたな」ナツちんさんは立上つて利イ坊さまをニラんだ。

「えゝ、さうぢやない――ア痛ツ！」

私たちが止める暇もなく、男の子は亂暴だ、いきなりナツちんさんは利イ坊さまの顔をポカン

と打つた。修三兄さまや私にはいくらムリを云つてもそんな事はなかつたけど、ナツちんさんは男の子だ、きかないさかりの十の男の子だもの、遠慮も何もない、いきなりブンなぐつちやつたんだワ。

「しどいワ、何すんのヨツ」利イ坊さまも負けずにナツちんさんをつきとばした。ナツちんさんはヨロヨロとして後へ下つて、汽車をふんづけてアツと云ふ間もなくひつくりかへつて、コンクリートに頭をゴツンとぶつつけた。

「お止しなさいヨ」

「マア、一寸」

高木さんはナツちんさんを抱き起した。私は利イ坊さまのあばれるのをシツカリと抱きかゝへた。ナツちんさんの泣き聲に伍兵衛さんがあはててかけつけて来た。

「こんなとこへ来て喧嘩なんてする子があるか、アレ、直樹さん、足から血が出てるヨ、ドレ、チエツ、仕様がなナ」

汽車のブリキで切つたと見えて踵の所から血が出て居た。伍兵衛さんは首にまいてゐた手拭を

半分に割いてグル／＼としばつた。

「伍兵衛さんがいけないのヨ、私にはくれないで此の子にだけカンナつ屑やるんだものオ」泣き乍ら利イ坊さまは伍兵衛さんに怒つてゐた。

「だつて此の子は男の子だから一寸ばかり手や服汚れてもかまはないが、お嬢さんの服は汚れたら困るぢやないですか。そんなに欲しかったら、もう乾いただらうから、いくらでももつてお歸んなさいよ」

伍兵衛さんは笑ひ乍ら困つた様な顔をし乍ら、裏庭の方へ利イ坊さまを連れて行つた。

私は高木さんと二人でナツちんさんをお家へ連れて行つた。反対の方へ二丁程行つた奥の方の家だつた。婆やさんが出て来た。

「お姉ちゃんは何？」ナツちんさんは心細さうにきいた。

「お姉ちゃんはおつとめでせう。昨日も學校から歸つてらしてきいた時そ云つたのに又忘れましてネ」婆やさんはさうすかす様に云つた。ナツちんさんは悲しさうに手の甲で眼を拭いた。

「どうぞ御大事に——」

足の怪我の事婆やさんにお願ひして私は御玄關を出た。

道々考へた事は、五百子さんは何處に何のおつとめをしていらつしやるのだらう、と云ふことだつた。ナツちんさんがお姉ちゃんのお留守のことを忘れる位だから、きつと近頃からおつとめにでていらつしやるにちがひない。

夕方、ねえやさんの代りに修三さまが迎へにいらした。利イ坊さまの眉毛の上が少うし赤く腫れてゐたのを見つけて「どうしたい？」とおつしやつたので、お母さんが今日のナツちんさんとのカンナ屑喧嘩のことを申しあげたら、修三さまのお笑ひになつた事つたら！

「ワハハ……そりや痛快！ タマにやられるのもクスリだナ」とおつしやつた。

「して敵將は？」とおつしやるから、

「ナツちんさんの怪我也大した事ありませんわ、先刻婆やさんと二人で御使ひに行くのにお店の前をお通りになつたから——」と云ふと「それは重疊々々！」ですつてさ。

利イ坊さまはボール紙の箱につめたカンナ屑を大事相にもつてお歸りになつた。

今日は色々な事があつた日だつた。

七

十二月二十×日——

もうあと二三日でお正月。昨日は市ヶ谷のお家のお引越しだつた。午前中はお兄さんと私、午後からはお母さんが私と代つてお手傳ひに行く。アトリエもスツカリ書庫と書齋になり、お父さまと修三さまはホク——。

さうく、お引越して一つの椿事は、伍兵衛さんの腰ぬかし事件。

お二階の洋間にベッドをもつて上る事になつた。窓から吊りあげようと云ふ事になつて、丈夫な綱でしばつて上に二人、途中の屋根に伍兵衛さんが（止せばいゝのに）ベッドをもちあげてゐた所、ベッドがスツカリ上つて「よオシ」と云つたトタンに、ベッドがスウツト窓の方へ入つちやつたので、伍兵衛さんつかまり所がなくなつて、アーと云ふ間もなく屋根からお庭へツイラクしちやつた（あゝ、考へただけでも胸がドキ／＼する）。ところが丁度ベッドのワラ蒲團や毛布が放り出してあつた上へ、マツサカサマに落つこつちやつたのだつた。

「少し腰のハマリ工合がアヤしいだけで——」と、アゴや腕をなでて、伍兵衛さん、しばらくキヨトンとしてゐた。皆ヒヤツとしたりホツとしたり——全く壽命が三年ばかりだ。」「伍兵衛さん、身體が大きくなかつたからだヨ——」修三さまがよかつたナ、と云ふ調子で傍へ寄つて云つた。

「へエ、おかげさまで——」と今更乍ら子供みたいに小つぽけな身體を見まはしてゐた。「圖體の大きい奴だつたら、自分の重みだけでも首の骨や脚の骨の一二本折れちまふぜ」よかつたわね、ほんたうに——と奥さまもねえやさんも、皆でホツと息をついた。

こんな大さはぎがあつたり、お荷物がゴチャゴチャになつたり、修三さまのお家はデングリがへつて居た。お盆とお正月が一緒クタに來たとよく云ふけど、お引越しと暮とお正月がワーツと一時なんだから大へんなものだ。

それに一月元旦の初日出を明治神宮へおまわりしたい、と云ふので大晦日の夜、静岡からお祖父さまとお祖母さまがいらつしやつて、當分東京にお住居との事だし——。

修三さまは今日も頬かぶりで、例の草色のアンダー一枚で長持を運んだり、茶箆筒をかゝへて

お茶の間中歩きまはつたり大フロントウだ。

「どうだ、岩見重太郎みたいに力もちだらう？」と大きな長持をふりまはしていらつしやるので、

「ほんとにマア！」と感心してゐると奥さまが、

「何ヨ、そんなフザケてないで、早くその中に着物を入れて頂戴よ」とおつしやつた。ナアング、空つぽだつたのだ。

「お八つに何か買つて來なきやア——」と奥さまがおつしやつた。ねえやさんはお勝手の棚の御掃除をしてゐたので、私がお使ひに行く事にした。

「オイ、豆の入つた大福を買つて來いよ」と修三様がおつしやつた。

「いやだワ、お大福なんて。鹽瀬のだとおいしいけど、他のところはアンコがしつこくつて——」利イ坊さまが又異議をとなへた。

「大福々々！ イヤにきどつたカステラやケーキなんてお腹の足しにならないぜエ。いゝか、大福買つて來いよオ」

踏臺の上からハタキをふりまはし乍ら修三さまのキツイ御たつし。ふくれ乍ら利イ坊さまは私

について来た。きつと大福ばかり買はれては困ると思つたのだらう。

通りのお菓子屋さんは大したものがない、それこそ大福が山の様にある位なもの。利イ坊さまはヤツとカステラマンジュウが三つ四つ残つてゐるのを探して、それを入れてくれとおつしやつた。

買物をして歸つて来ると御門のところに、ナツちんさんが立つてゐた。そして私たちの顔を見ると眞面目くさつて丁寧にお辭儀をした。私も丁寧に「今日は」と頭を下けた。利イ坊さまはえはつて入つて行かうとしたけれど、ナツちんさんがあんまり丁寧に辭儀をしたので、一寸立止つてナツちんさんを見た。こないだの喧嘩の後、利イ坊さまはそのイヂワルを大へんお父様に怒られたので、とても恥しさうだつた。ところがナツちんさんも恥し相なの、きつとナツちんさんもお姉さまに叱られたのかも知れない。

「もう君のお家ね」

ナツちんさんはさう云つて笑つた。御門には新しい瀬戸物の表札がかゝつてゐるし、前庭の植木は色々と手を加へられて、前とはまるでちがつてゐる。さつきからナツちんさんはこの御門の

柱のかけから中をのぞいてゐたのかも知れなかつた。こないだ五百子さんの買つていらした青色の毛糸のズボンをはいてゐた。

利イ坊さまはナツちんさんの言葉に一寸顔色を和げた。「君のお家ネ」と云はれたので嬉しくなつちやつたらしい。

「とても中キレイになつたでせう」ナツちんさんはなつかし相に云つた。

「え、二階のヴェランダも塗りかへたわヨ。下の洋間、貴方の部屋だつたんでせう、汽車をひきすつた後がお廊下の方までついてゐたワ、だからリリユウムを敷いたのヨ」

利イ坊さまは説明する様におつしやつた。

「あの部屋、君が取つたの？」

「エ、寝る時はお茶の間の日本間だけど、晝間はあすこが私の勉強部屋なの。お友達が来た時はあすこで遊ぶのよ」

「壁にいたづら書きしてごめんなさス」

「大丈夫、あすこんどこに本箱おいたから——」いかに、いゝのよ大丈夫と云ふやさしい調

子。

「窓のガラスが割れたの、入れかへた？」

「エ、模様ガラスを入れていたたゞいわよ。とてもキレイよ、見に来る？」

この間あんな喧嘩をした二人が、今日はあんまり両方ともおリコーなので、私はとても嬉しかった。ナツちゃんさんは嬉しさうにうなづいて、利イ坊さまと並んで御門を入つて行つた。その後から私は歩いて行つたけど、ほゝゑまれてく仕様がなかつた。

「オオ、坊ちゃん、いらつしやい、どオ、とても變つたでせう？」

利イ坊さまのお部屋から出て来たナツちゃんさんの姿を見て、お父様はやさしく聲をおかけになつた。

お縁側に椅子を出して皆でお八つをたべてゐた。ナツちゃんさんは「こつちへいらつしやい」と奥さまに呼ばれて、恥しさうに笑つてその傍へチョココンと坐つて、一緒にお大福をたべた。

そして一寸眼をパチクリさせて「あの、こないだ、いちめてごめんなさい。僕お姉さまにいけない子だつて叱られました」と首を下げた。

「いゝんですヨ。利恵子だつて悪いの……今度のお家、いい？」修三さまが尋ねた。

「パパと一緒に寝るからともいゝよ。今迄はパパお二階でせう、僕子供部屋で一人で寝たんですもの、淋しかつたよ」

「子供はその方が餘程いゝんですよ。やつぱり親にはくつついてゐたいもんです」

奥さまがさうおつしやつた時、私も、ほんとに、広い家でお母さんのないナツちゃんさんが一人で寝てゐたなんて、なんて可哀相だらうと思つて、今度のお家はせまい爲にお父さまと一緒に寝られるならほんとにいゝわネ、と安心した。

「お父さんは毎日お出かけ？」

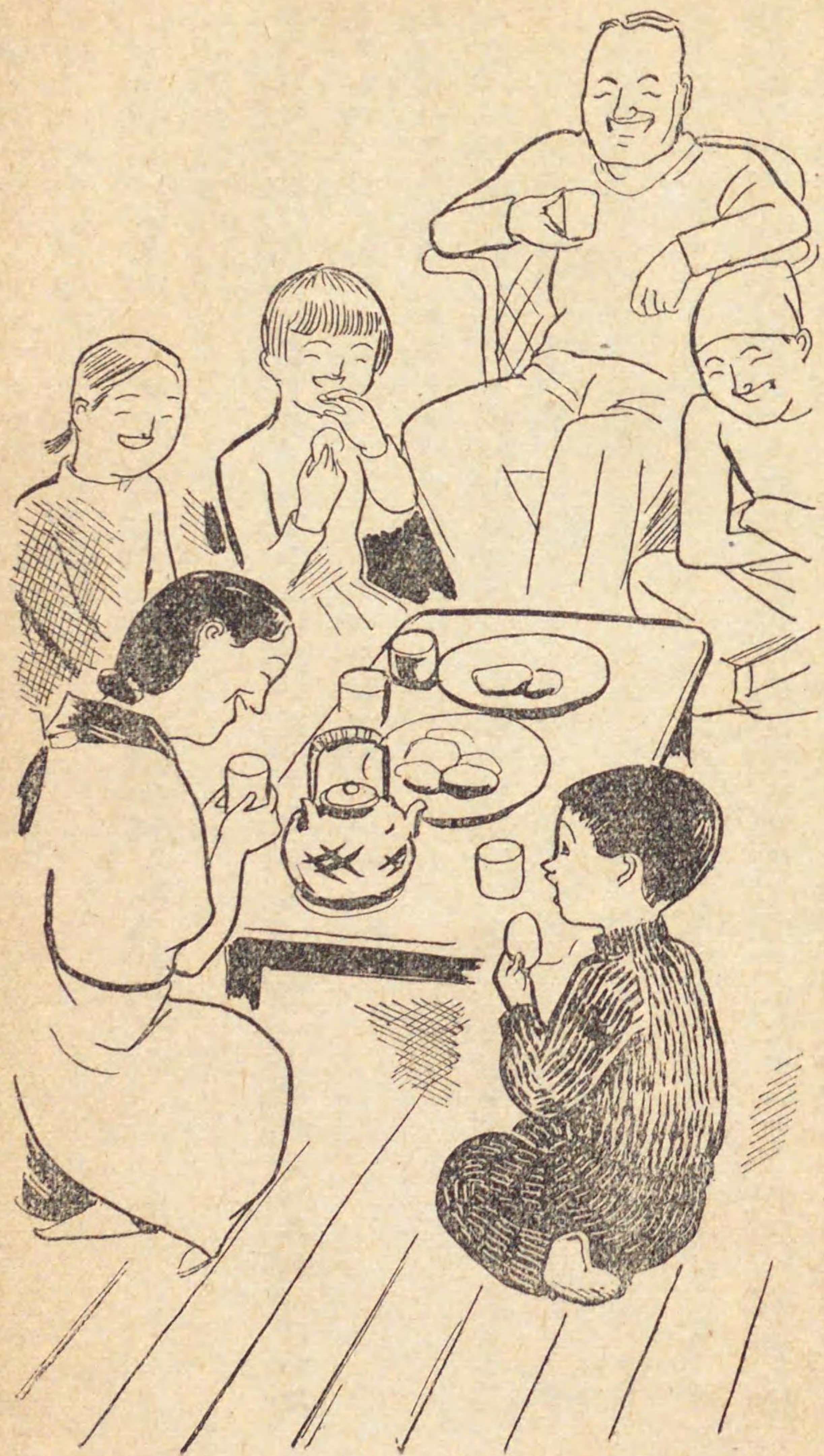
「いゝえ、大いお家。グウ／＼寝てばかり——」

皆はワツと笑つた。

「直樹さんのお父さんはネボスケなんだナ」と修三さまがからかふみたいにおつしやつた。

「いゝえ、御用がないからだ、つて婆やが——」

「ホオ、御用がないの、そりやいけなね。一つお父さまに御用をあげようかな」



お父様はさう云ひ乍ら修三さまの方を御らんなつた。

「竹柏クラブのあの事ですか？」

修三さまはうなづいた。

「竹柏クラブつて？」奥さまは御存知ないらしい。

「お父様の方の會社の集會場ね、あすこの食堂とサロンを今度改造したんですヨ。それに須賀さんに壁畫をかいていたどかう、つてこないだからお父様そいつてらしやつたんですヨ」

「あゝ、さう、それは結構なお話ね、須賀さんにお願ひしたら——」

「壁の方はまだ急がないんだけどね、眞正面にかける奴だけ大急ぎで一枚ほしいんだ、二十五日に新年宴會があるまでにネ——」

「マア、そんな御無理をお願ひなさると、又須賀さんいやだとお断りになるんぢやありませんか？」

「大丈夫ですよ、断らせやしないヨ」

修三さまはまるで自分がかけあひにでも行く様な口調。ナツちんさんはよくわからないらしく

も、パパのよい事らしい、とだけはわかつたのか、目を輝やかして、

「ぢや、パパ呼んで来ませうか」と大乗氣。

「アラ、今もパパお家でグウ〜なの？」奥さまは笑ひ乍らおつしやつた。

「エ、さう」

「ワハハ、子供は皆白状しちやふからかなはないな——ぢやネ、今夜一寸御話におうかがひいた
しますから、つて歸つたらパパにさう云つておいて下さい」

お父様がさうおつしやるとナツちんさんは、

「ハイ、かしこまりイ——、ぢや起しておきますネ」と大急ぎでとんで歸つて了つた。

八

一月×日——

明日から三學期がはじまる。今日は午後から修三様に連れてつていたゞいて、新宿へ映畫を見
に行つた。修三さまと利イ坊さまと高木さんと私。前からの約束では今日高木さんが家へカルタ

を取りに来る事になつてゐたので、さう云つて映畫のおさそひを一度お斷りしたらば「高木君も
連れてつちまへヨ」とおつしやつたので一緒に連れてく事にした。

ムサシノ館へ入つて、とんだりはねたりするキレイな踊の映畫を見た。高木さんはあんまり西
洋の映畫は見た事ないので（私だつてさうだけど、でも時々お姉さんとこのお義兄さんと行くけ
ど、マア一月に一遍位。そいだつて高木さんみたいに一昨年のお正月「キングゴングの復讐」を
みたなんて云ふのとは一寸ハバかり乍らちがふ）、その映畫がすんだら夢中になつて頬ペタをほて
らしてゐた。

「面白かつた？」ときくと、

「何だか知らないけど、西洋人つてよく喋るわネ、それにあんまり早くとんだりはねたりするん
で目が廻りさう——」だつて。

「耳も目もまはつちやつて、ついでに口までよくまはるネ」つて修三さま。

ムサシノ館を出たのは五時すぎだつた。

「御飯を御馳走するかな！」と修三さまは皆を見まはした。イヤにお金持なんだナ、御年玉はい

つたいどれ位おもらひになつたのかしら……？ お父さまに十圓、お母さまに五圓、さうそ、お祖父さま方がいらつしやるんだし、——いゝなア。私はお母さんに一圓、兄さんに五十錢、お姉さんとこで一圓、修三さまのところで一圓だつた。高木さんはお父さまに二圓もらつたきりだ、つて云つてゐた。そして弟たちに十錢づつお年玉にやつちやつたからトタンにピンボーさ、つて云つて居たつけ。私は弟妹が居ないからそれだけ助かつた、と云ふわけか。

オリンピックと云ふヤタラと混んだムヤミと明るいとこで御飯をたべた。

「悪いから私ほらふわ」御飯がすむと高木さんは、さもすまないみたいに云ひ出した。

「いゝよ、僕がおごるから——」

「だつて先刻の映畫も出していたゞいたし——わるいわ、そんなに——」

「いゝんだつてば——」

「だつて——」

「そんなら君皆の分もはらつてくれ給へ——」

「アラいやだ！」

高木さんは眞赤になつた。修三さまはアハハと笑ひ乍ら五圓紙幣を出してレジスターで御勘定をした。

それから四人は紀州屋書店へ入つて行つた。修三さまは岩波文庫とかを買ふために、私たちはちがふ目的のために。

「ア、あすこにいらつしやるわ」

利イ坊さまが奥の方を指さした。奥の外國の本のある棚の前に、青い上つぱりを着て裾から濃いブドー色のスカートを四五寸出した五百子さんがニコ／＼笑つて立つてゐらした。

こないだうかがつただけど、五百子さんはこゝのお店におつとめをしてゐらしたのだ。

「ヤア、御元氣ですか？」

お正月の二日、五百子さんが御年賀にいらした時、修三さまはお友達のか藤さんのところへいらしたとかで、まだ一度も五百子さんのお顔を見ないのだ相だつた。

「今年はじめまして。どうぞ今年も相かはりませす御引きたての程を——」修三さまがピヨコンと頭をおさげになつた。

「いやなお兄さま、皆が見てるわ」利イ坊さまは笑ひ乍ら恥しさうだつた。

「あら、こちらこそ、どうぞ今年も父をよろしく御願ひいたします。とてもハリ切つて、お正月の元旦から今までうつちやつておいたアトリエをかたづけ、夢中になつて描いてゐますのヨ、あのクラブの繪を——」

五百子さんは生々とした顔で云つた。

「あゝさうですか、ありがたいです。どうせ會社の重役ドモなんてのは盲目ばかりですから、何も遠慮なくお父さまのお描きになりたいのを描いて下さい。何の繪ですか？ 風景ですか？」

「食堂用だとおつしやつたので、酒の神と妖精のたはむれてるところだつて云つてましたワ」

「あゝさうですか、三本脚のバツカスですか？」

「あらいやだワ、どうして？」

「だつて二科の人は皆、身體がバラ／＼になつたり、手足が數本あるみたいなのを描くぢやないですか、アハハハ……」

「まさかア——」

五百子さんと修三さまが大きな聲で笑つたので、本當にまはりの人たちはそつちの方を見た。

「七草の中はお店早じまひなんでせう、どうです、御待ちしますから一緒に歸りませんか、そしてカルタでも取らんですか？ ナツちんさんが姉さんとてもカルタ上手いよ、つて云つてましたから、僕こないだから方々へ遠征して腕をミガいて來たんですヨ」

「あらウソですワ、カルタはカルタでもイロハガルタですわヨ」

五百子さんは恥しさうにけんそんなすつた。その時チリチリ／＼と閉店のベルが鳴つた。閉めたカーテンを下された入口から出乍ら「ぢや、驛に待つてますからね」と修三さまはおつしやつた。

「修三さま、五百子さん好きらしいわネ」だつて、高木さんたらソツと云つた、イヤな人！

「高木さん——アラ、初子さんも、まあ、皆さんね」

驛のプラツトフォームへ行くガードを歩いてゐると、肩をたたいた人がある。見ると花江さんだつた。花籠をもつてゐた。

「歸るの？」

高木さんはい、道連れが出来たとばかり花江さんにくつついた。

「エ、何だか雪が降つて来さうだから、今日はもう早終ひにしちやふの——」

「伍兵衛さんは其の後どうだい？ 腰は直つたかい」

「エ、ありがたうございます。おかげさまで三日頃から起きて居ます」

「そりやあよかつたネ。全くあの時はこつちの方がヒヤツとしたヨ。メガネをかけさせたらどうだい？ しよつちゆう自転車ひつくりかへしたり、屋根から落ちたり、どうもキケンきはまるぢやないか？」

「ほんとに私たちも心配なんですよ。でもネ、メガネなんか大工はかけるもんぢやないつて、きかないんですヨ。大工が印半纏着てロイドメガネなんかかけたの見られたもんかい、つて云ふんですの」

「アハハ……頑固伍兵衛の面目ヤクジョぢやな——」

プラツトフォームで話してゐると、五百子さんが青い上つぱりを脱いで外套を着て、いらした。

花江さんに聲をかけた。

「花江さん、早終ひ、あなたも？」

「え、だつてお嬢さんところのお店がしまつちやふと、あの前人通りが淋しくつてね、お正月は駄目よ、皆あそびに夢中で十銭花なんか眼中にないんですもの——」

修三さまは花江さんにもカルタをとらないかとさそつたけれど、明日から妹の小學校がはじまるので朝早く起きなきやなりませんから、と云つて「さよなら」を云つて、高木さんと向方のフォームへ行つて了つた。

「おつとめは愉快でせう？」

電車に乗つてから修三さまは革にぶら下り乍ら、隣の五百子さんにきいた。

「エ、とても。面白い事がするふんありますのヨ。今日もね、夕方、酔つぱらひの紳士が入つて来てね、どうしても一圓五十銭の本を五十銭にまける、とおつしやるの。おまけ出来ません、と云ふと、夜店で五十銭で賣つてるもの、この店だと何年たつても一圓五十銭か、フンさうか、ぢや夜店で買ふ方がトクだな、つて一人でうなづいて歸つておしまひになつたワ」

「成程、よつばらひならずとも考へちやふですネ」

「さうでせう、發行先で安賣りしたもので、あの紀州屋の棚から賣るのはもとの値段なんですわ——」

「フーン、そいつは面白い事實ですな。——働いてゐると色んな勉強をするでせう？」

「え、全く。私何故もつと早くおつとめしなかつたのか残念な位ですわ」

「あの花江さんといつても歸り一緒なんですつて？」修三さまは話題をかへた。

「え、驛までいつも。ほんとに彼の方もえらいわ。このさむいのに外に立つて四時間も五時間もネ。あの方見ると私いつも勇氣をふるひ起してもつと／＼と思ふのヨ」

「フーン、えらいな、皆」

二人はさかんに意氣投合していらつしやる。修三さまはそしてヤタラと感ゲキしてる。

「初ちゃん、カルタ上手いの？」利イ坊さまが私にきいた。二人ばかり御話していらつしやるから淋しくなつて、私と組にならうと思つたのらしい。

「いゝえ、あんまり上手くないの」

「ぢや私と双六しない？」

「え、一遍位はしてもいゝわ」

一人ぼつちにされちやふのが淋しいらしい利イ坊さまに同情して、私は双六を引き受けた。

十時頃までカルタや双六やトラムプをして修三さまのお家であそんだ。ナツちゃんも呼んだので私は双六の方は割と助かつた。

修三さまと五百子さんが同じ位上手いので、二人でいつも向ひあつて私が読み役。三度目には聲が出なくなつて了つて奥さまに代つていたといちやつた。

歸り、「貴方の方の學校は幾日からですか？」と五百子さんがきいた。修三様は、「十五日頃からです」と返事をなすつた。

「貴女は朝はやつぱし、あの、八時二十分すぎ頃、驛ですか？ ああさうですか、僕の方の學校もせめて十日頃からはじまるといゝんですが——」

修三さまはさうおつしやつて一寸頭をおかきになつた。

私だつて朝五百子さんと御一緒に行きたいんだけど——十五日から先は困つちやふなア、だつ

て一緒になれば何だか修三さまと五百子さんのお話を邪魔する様だし――。

九

一月三十日――

今日は修三さまと利イ坊さま、ナツちんさんも一緒に竹柏クラブへ、須賀さんの壁畫かきのお仕事を見に行くのに連れてついでいたゞいた。

高い足場の上で須賀さんは大きなハケみたいな繪具筆を動かしていらした。

五百子さんの編んであげた、あのスコッチの茶色のスエターを、温かさうに着てゐらしたつけ。

こゝ一ヶ月位はズーツとこのお仕事をなさるので相であつた。立派な繪を畫いて下さる様に！

私もお祈りしてゐる。

お父さま同志は仲のよい御友達だし、修三さまと五百子さんも、そして利イ坊さまもナツちんさんと仲よしになつた。ナツちんさんは時々泊りに来て、利イ坊さまのお母さまのおそばで、利イ坊さまとお母さまをばさんで寝ねするんだ相だ。ナツちんさんもいいお母さまが出来てうれ

しい事だらう。

あのお家を御注進してほんとによかつたナア、と、此の頃毎晩の様にお母さんやお兄さんとお喜びして居る。

昭和十四年七月十五日印刷
昭和十四年七月十九日發行

定價一圓五〇錢

チビ君物語

著者
檢印者

著者 鈴木富美子

發行者 東京市京橋區銀座西一丁目三番地
增田義彦

印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
根本力三

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
大日本印刷株式會社

發行所 東京市京橋區銀座西一丁目三番地
實業之日本社
振替東京三二六番

吉屋 信子 著

花

物

語

上巻 1.50
中巻 1.50
下巻 各
内 地 0.10
外 郵 0.12

これは種々の花になぞらへた、種々の少女等の物語集です。一つの物語は、その題名の花と全く同じやうな心と運命を持つ少女を物語つてゐます。その一つ一つが、或ひは可憐に、或ひは華かに、或ひは麗しく、少女の純情と様々な運命との交錯によつて、花咲き、或ひは散つてゆく、趣き深い物語を奏でるのです。

上巻

中巻

下巻

- 目次
- 鈴蘭・月見草・白萩・野菊・山茶花・水仙・名も無き花・鬱金
 - 櫻・忘れな草・あやめ・紅薔薇
 - 白薔薇・山梔の花・コスモス
 - 白菊・蘭・紅梅白梅・フリージア
 - ア・緋桃の花・紅椿・雛芥子
 - 白百合・桔梗・白芙蓉・福壽草
 - 三色堇・藤・紫陽花・露草
- 上巻
- ダリア・燃ゆる花・釣鐘草
 - 寒牡丹・秋海棠・アカシヤ・櫻
 - 草・日蔭の花・濱撫子・黄薔薇
 - 合歡の花・向日葵
- 中巻
- 梨花・桐の花・白木蓮・沈丁花
 - 花・水蓮・玫瑰花・スキートビ
 - イ・ヒヤシンス・ヘリオトロピ
 - プ・龍膽の花・心の花・曼珠沙華
- 下巻
- 中原淳一装幀

行發社本日之業實

吉屋信子著少女物語

紅

雀

美しく聰明な少女達が人生の荒波をくぐつて行く時に織りなされた麗麗な感觸であります。

價 一圓
送料 内 郵 0.10
外 郵 0.12

七

本

椿

七本の椿の紅白の花によせて、七人の少年少女の生活と、その心の成長を描いた物語。

價 一圓三〇錢
送料 内 郵 0.10
外 郵 0.12

小

さ

き

著者が若かりし少女時代の思ひ出を喚び起し、愛と悲しみと喜びの場面を美しく描かれたもの。

價 一圓二〇錢
送料 内 郵 0.10
外 郵 0.12

か

ら

た

一少女が心の中に崇高い美しきを見出すまでの奮闘を描いたからたちの花にも比すべき純情物語。

價 一圓二〇錢
送料 内 郵 0.10
外 郵 0.12

櫻

貝

白い活に散る花片のやうな一つ一つの櫻貝にも約ふ美しい少女小説であります。

價 一圓二〇錢
送料 内 郵 0.10
外 郵 0.12

行發社本日之業實

平井美奈子著

樂聖物語

松野一夫裝幀

ベートーヴェン、シューベルト、ショパン、シューマン、の
四大樂聖の傳記物語。怒濤のやうな、或ひは微風のやうな、
あの大音樂は如何して生れたかを知ることが出来ます。

價一圓六〇錢

送内 料一圓 鮮滿支 地 一〇錢

川端康成著

乙女の港

中原淳一裝幀

著者独自の美しい抒情の世界は、あなた方に、こよない讀書の
よろこびを興へることです。この「乙女の書」は、あなた方の
心に芽ぐまうとしてゐる美しい心情を呼びさすものです。

價一圓五〇錢

送内 料一圓 鮮滿支 地 一〇錢

神崎清著

少女文學教室

松本かつぢ裝幀

本書は、日本文學の建設に大きな足跡を残した文學者の、評
傳や作品研究をしながら、文學の讀み方や味ひ方、文學と結
びついた人生の諸問題をも示したものです。

價一圓五〇錢

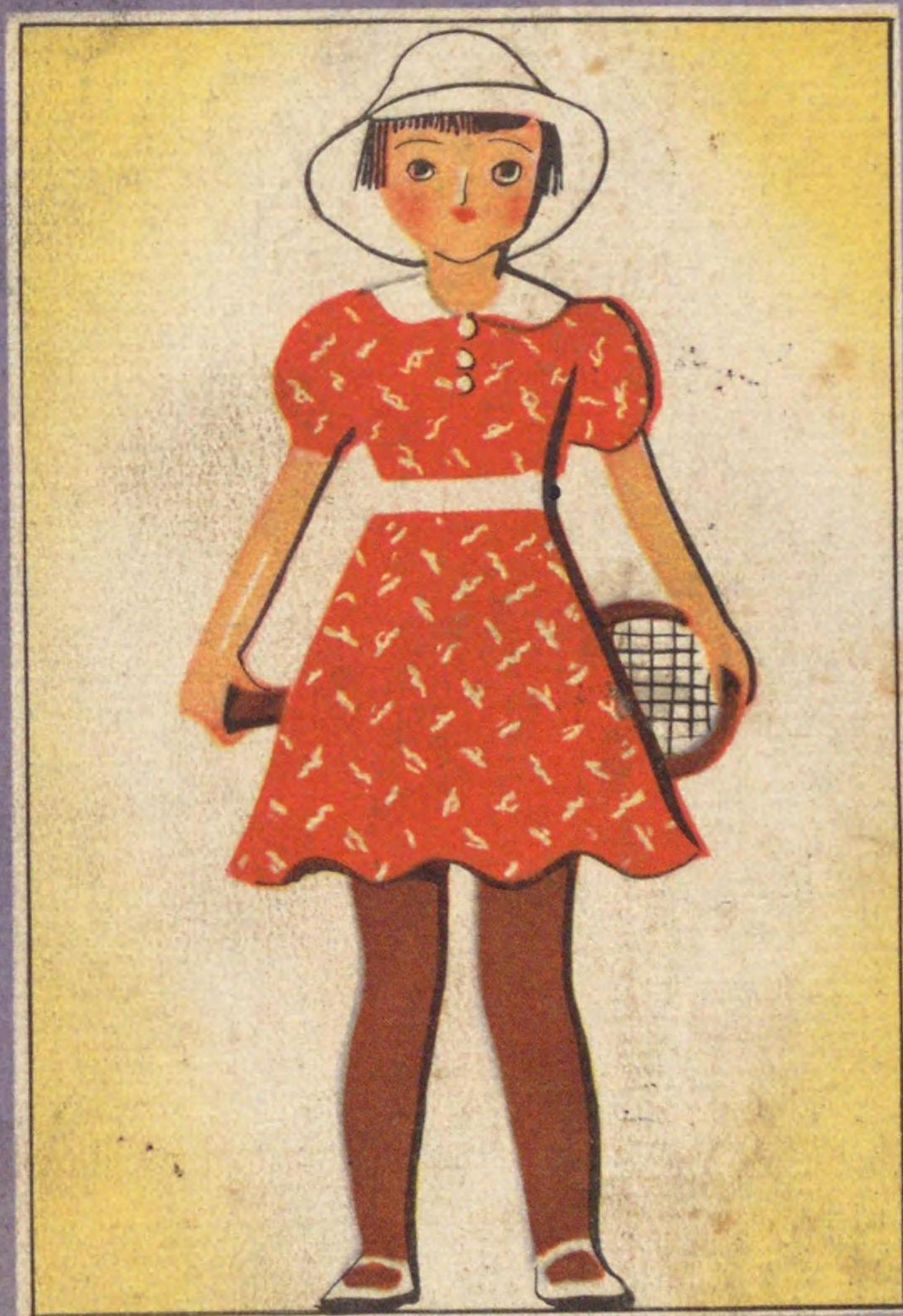
送内 料一圓 鮮滿支 地 一〇錢

390
344

児乙部39-Y-3



1200600484538



¥ 1.50 行發社本日之業實 語物君ビチ